

北方民族博物館調査報告 2

能取岬周辺の遺跡

美岬 4 遺跡・能取岬西岸遺跡・美岬 5 遺跡

1999



北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

例　　言

- 1 本書は北海道立北方民族博物館の調査研究事業の一環で、平成7(1995)年度から平成9(1997)年度にかけて実施した美岬4遺跡、能取岬西岸遺跡の発掘調査と能取岬周辺の遺跡分布調査の報告書である。
- 2 本書の執筆は青柳文吉（北海道立文学館学芸員：95-97当館学芸員）、熊木俊朗（東京大学人文社会系研究科附属常呂実習施設）、稻垣はるな（当館学芸員）が分担し、文末に執筆者の氏名を記した。図版等作成ならびに本書の編集は主に稻垣が行った。
- 3 遺跡分布図には国土地理院発行の5万分の1の地形図「網走」「能取岬」の一部を使用した。また美岬4遺跡と能取岬西岸遺跡報告中の遺構実測図の方位は真北であり、美岬5遺跡測量図の方位は磁北である。
- 4 調査および本書の作成にあたり、以下の方々、機関のご協力、ご助言を賜りました。ここに氏名を記し、感謝申し上げます。（順不同、敬称略）

宇田川洋、佐藤宏之、熊木俊朗（東京大学）、松田功（斜里町立知床博物館）、

佐藤和利（紋別市立郷土博物館）、和田英昭（網走市立郷土博物館）、

右代啓視（北海道開拓記念館）、松尾歎（北海道網走南ヶ丘高等学校）

調査参加者（50音順）

美岬4遺跡　　青柳文吉、笠原亮平、笹倉いる美、佐多直子、田中澄子

能取岬西岸遺跡　青柳文吉、奥山功、熊木俊朗、小屋松直子、笹倉いる美、佐藤祐子

美岬5遺跡　　稻垣はるな、熊木俊朗、佐藤和利、中田篤、渡部裕

目 次

例言

目次

第1章 能取岬周辺における遺跡について 1

第2章 美岬4遺跡 7

- | |
|-----------------|
| 1 調査の概要 8 |
| 2 1号竪穴 10 |
| 3 2号竪穴 15 |
| 4 小括 18 |

第3章 能取岬西岸遺跡 19

- | |
|------------------|
| 1 調査の概要 20 |
| 2 調査の結果 25 |
| 3 小括 36 |

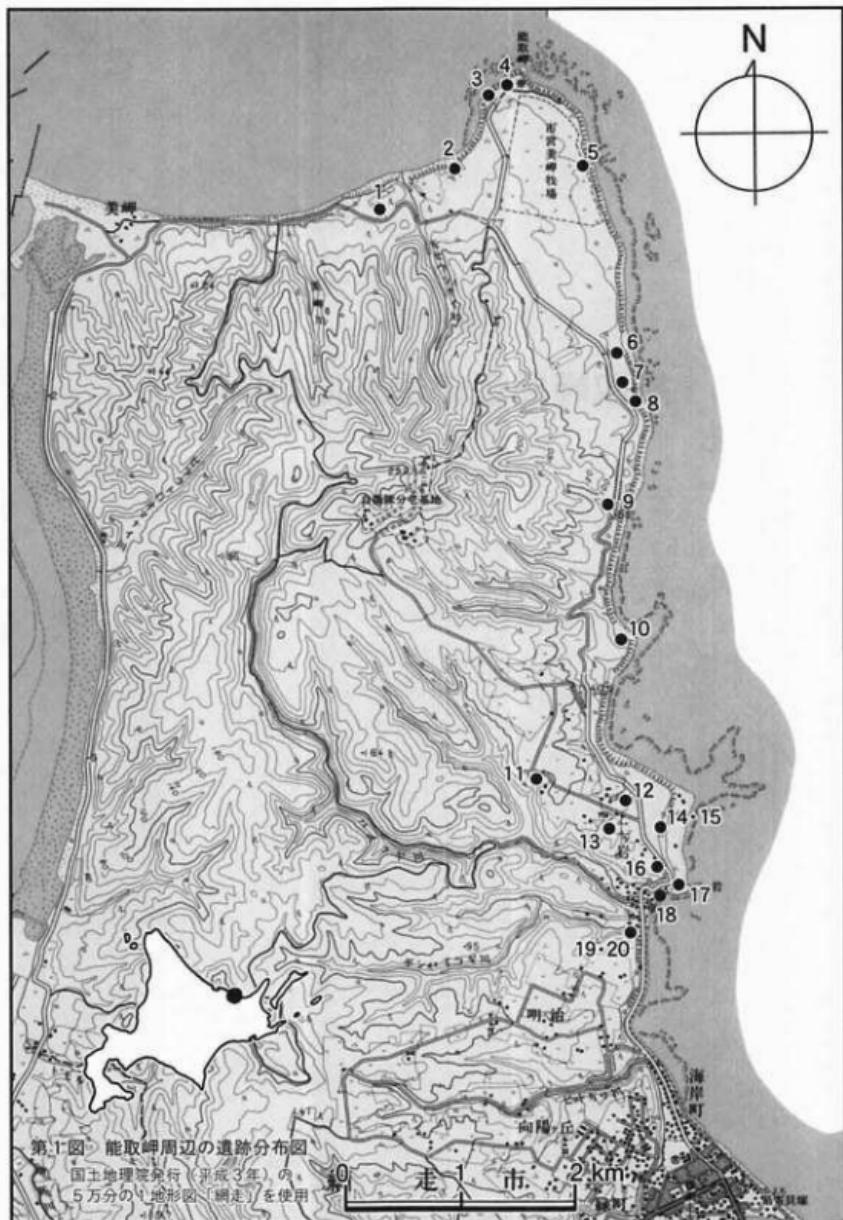
第4章 美岬5遺跡 39

- | |
|------------------|
| 1 調査の概要 40 |
| 2 調査の結果 40 |
| 3 小括 41 |

第5章 まとめにかえて 45

参考・引用文献 48

写真図版 49



第1図 能取岬周辺の遺跡分布図

国土地理院発行(平成3年)の
5万分の1地形図「網走」を使用

能取岬のある能取半島は、オホーツク海と汽水湖である能取湖に挟まれて、網走湖の北に突出した海岸段丘からなる台地である。オホーツク海に面した東海岸と岬の先端付近は、高さ30~50mほどの海岸崖になり、その段丘上は比較的緩やかな傾斜地である。崖の下は砂浜や岩礁となっている。モセウシナイ川、美岬川、バイラギ川、ポンパイラギ川、そのほか地図上には名前の記されない小河川や沢がオホーツク海に注いでいる。その反対側の能取湖に面した側は尾根から湖岸まで一続きの斜面になっている。能取湖にはビラウトロオマナイ川などの小河川が注いでいる。この一帯は網走国定公園内の国有林（保安林）であるため、道道敷設にかかる一部の緊急調査や学術調査のほかには発掘調査は行われてこなかったが、分布調査等によって縄文時代からアイヌ期にかけての多数の遺跡の存在が確認されている。古くから人が居住してきた地域であることは明かである。特に能取半島の東側、オホーツク海岸沿いの海岸段丘上に遺跡は多く、海岸沿いにはオホーツク文化や擦文文化の遺跡が見られ、それよりも古い時期の遺跡は多少内陸にはいった所に位置しているようである。西の能取湖側では現在の所あまり遺跡は確認されていない。

能取岬周辺の遺跡については米村哲英と和田英昭による紹介(米村・和田1982)があるが、それをふまえて、ここでは今回の当館による遺跡分布調査で新たに発見されたものを含めて簡単に紹介する。

1 美岬3遺跡

標高約60mの海岸段丘上に立地し、1992年に網走市教育委員会によって発掘調査が行われた縄文時代中期の遺物包蔵地である。

2 能取岬西岸遺跡

平成8年度に当館で発掘調査を行い、今回報告する遺跡である。標高約40mの海岸段丘上に立地する。1982年の右代啓視・西本豊弘による調査で縄文時代中期から擦文・オホーツク文化期の土器、石器、骨角器、鉄鍋、動物遺存体などが採集され、崖面に堅穴住居址が確認されている。

3 NM-02遺跡

標高約40mの海岸段丘上に立地し、縄文時代中期の土器片、石器等が採集された遺物散布地である。

4 能取岬遺跡

標高約40mの能取岬先端、現在美岬灯台のある西側に位置し、公園・駐車場となっているため確認できないが、チャシがあり、遺物が採集されたという。

5 NM-11遺跡

標高約40mの海岸段丘上に立地し、統縄文時代の土器片とともに小貝塚、堅穴が確認されている。

6 NM-01遺跡

標高約40mの海岸段丘からオホーツク海に注ぐ小川によって形成された舌上台地上に立地する。擦文時代のものと考えられる堅穴群と統縄文土時代の土器片や石器の散布が確認されていて、1980年に網走市立郷土博物館によって堅穴住居址1カ所の学術調査が行われている。

7 美岬4遺跡

平成7年度に当館で発掘調査を行い、今回報告する遺跡である。標高約50mの海岸段丘からオホーツク海に注ぐ小沢に面した台地上に立地する。縄文時代の堅穴住居址が2カ所確認されている。

8 美岬遺跡

標高約55mの海岸段丘上、北に突出した舌状台地上に立地する。縄文時代のものと考えられる堅穴住居址が3カ所確認されている。

9 美岬2遺跡

標高約70mの海岸段丘上を流れる沢に面した舌状台地上に立地する。1990年に網走市教育委員会によって調査された縄文時代中期の遺物包蔵地である。

10 美岬5遺跡

今回当館で測量調査を行い報告する遺跡である。標高約50mの海岸段丘上に立地する。縄文時代のものと考えられる堅穴住居址が11カ所確認されている。

11 ニツ岩2遺跡

標高約100mの台地の端で、沢に面して谷におりる手前の部分に位置する。縄文時代中期の遺物包蔵地である。

12 A B-01遺跡

標高約60mのオホーツク海に注ぐ小沢に面した台地の中腹に位置し、縄文時代中期と続縄文時代の土器片、石器等の遺物散布地である。現在は畠地となっている。

13 A B-02遺跡

標高約60mの海岸段丘上の台地の中腹に位置し、縄文時代早期・中期の土器片と石器が採集された遺物散布地である。現在は畠地となっている。

14 タンネシリリチャシ

標高約40mの海岸段丘からオホーツク海に注ぐ2本の小沢に挟まれ、1条の塹で切られたチャシで、塹内部にオホーツクまたは縄文文化のものと考えられる堅穴住居址が3カ所確認されている。

15 美岬6遺跡

標高約40mの海岸段丘からオホーツク海に注ぐ小沢に面した台地上、沢を挟んでタンネシリリチャシの南側に立地し、オホーツク文化期または縄文文化期のものと考えられる堅穴住居址が2カ所確認されている。

16 ニツ岩遺跡

標高約40mの海岸段丘上に立地し、1975~79年にかけて北海道開拓記念館によってオホーツク文化の堅穴住居址3カ所の調査が行われている。

17 ニツ岩チャシ

標高約45mのオホーツク海に突出した岬の先端で、2重の塹を持つと伝えられているが、現在は道道網走公園線によって削られ、失われている。

18 バイラギ水族館遺跡

標高5～6mの砂丘上に位置し、縄文時代からオホツク・擦文時代までの遺物包含地である。水族館建設のために多くの部分が消滅したとされているが、ニツ岩遺跡の崖下砂丘に位置する「ニツ岩海岸砂丘遺跡」(米村・和田1982)も含む広がりを持つ遺跡と考えられる。

19 バイラギチャシ

標高20mの海岸段丘上、バイラギ川とポンバイラギ川に挟まれた舌状部の先端に位置し、単塙があったとされているが、現在は神社の整地のためか失われている。

20 バイラギ遺跡

標高約20mの海岸段丘上、バイラギチャシと同位置に立地、整穴住居址3カ所が確認され、擦文土器片、石器等が採集されている。

(穂垣はるな)

1 調査の概要

1) 調査に至るまで

北方民族博物館では、調査研究事業として、平成4年から6年にかけて網走管内湧別町に所在する川西遺跡において発掘調査を実施してきた。そこではオホーツク文化の貼付浮文土器を伴う竪穴住居跡を中心に調査を行い、種々の成果を得たのであった（北海道立北方民族博物館編1995）。

当館では、これに引き続き新たなテーマに基づいた考古学的な調査を計画することになった。年次計画として、平成6年度に調査計画策定のための分布調査を行って情報を蓄積することにし、それに基づく具体的な調査を平成7年から9年度にかけて行うこととした。調査計画策定では、当館の設立趣旨から、北海道のオホーツク文化とそれに直接間接に関わるであろう続縄文、襟文化を調査の主眼にすることは明らかであるにしても、対象地域をどこに設定するかということが課題となつた。

検討の結果、北海道北東部のこれら遺跡における考古学的な情報と資料の収集・蓄積に主眼に置くこととした。情報が希薄と思われた常呂町と網走市の行政界付近から、網走市の東部に隣接する小清水町にかけての海岸線を対象にし、分布調査を行うことにした。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地以外に新たに数カ所の遺跡を発見・追加することができた。ここで調査結果を報告する当「美岬4遺跡」もそのうちのひとつで、林地内にあって保存状態も良好と思われたことから、平成7年度の発掘調査対象地に選定した。

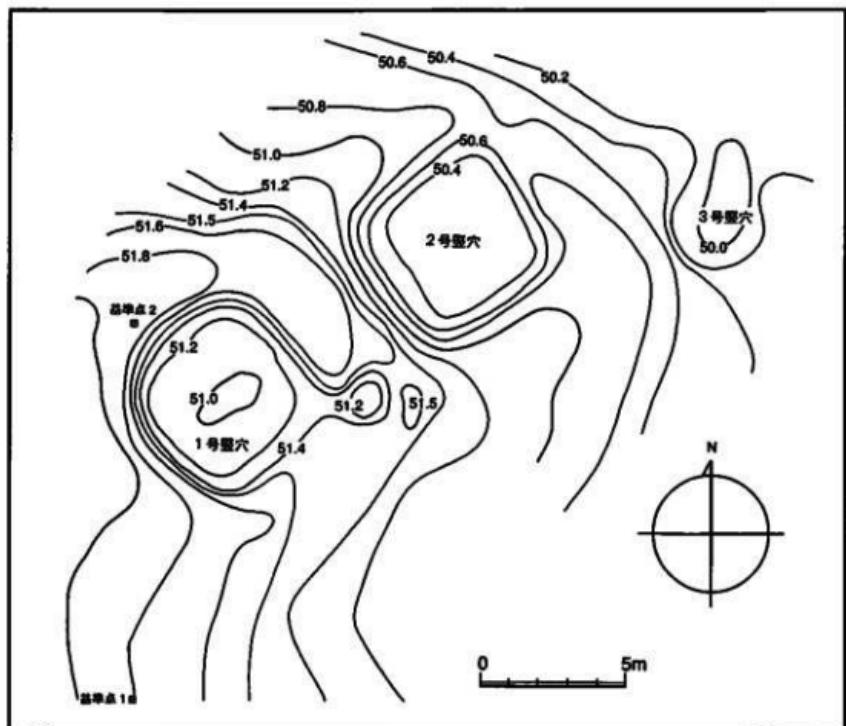
美岬4遺跡が立地する能取岬一帯は網走国定公園にふくまれ、しかも遺跡のある場所は国有林（保安林）である。このことから、数回にわたって国定公園を管理する北海道網走公園事務所及び国有林を管理する北海道営林局網走営林署と協議をかさねなければならなかつた。

協議の結果、調査に際して立木の伐採や調査時期、調査方法などに制限が加えられた。しかし両機関は、当館の調査の趣旨に理解を示され多大な便宜を図ってくださつた。このことに対し心から感謝したい。

自然公園法の規定により行った「特別地域内土地の形状変更許可申請」に対する許可記号番号は「網林務第2-47号指令」である。

2) 遺跡の立地と自然環境

網走市内中心部商店街から、網走川にかかる河口に一番近い網走橋を渡ると、すぐ右手に小さな森が見える。オホーツク文化を代表する遺跡として著名な国指定史跡「モヨロ貝塚」である。道々網走公園線はモヨロ貝塚を右手に見ながら北に向かい、水産加工場や住宅街を通り抜けてやがてオホーツク海の海岸沿いにでる。ニツ岩地区を抜けるとすぐに急な登り坂となり、たちまち標高50mほどの段丘上に達する。ここには、かつて北海道開拓記念館によって発掘調査が行われたオホーツク文化期のニツ岩遺跡がある（北海道開拓記念館編1982）。ちなみにこのニツ岩遺跡の眼下の海岸沿いにはオホーツク文化と続縄文時代の複合遺跡が存在することが知られているが、現在は住宅がたてこんでいるため現況での確認は困難である。このニツ岩遺跡からオホーツク海に突き出した能取岬先端までの段丘崖には、海に向かって流れ出るいく筋もの小河川があり、そこには大小の集落遺跡が存在する。



第2図 美岬4遺跡地形図

美岬4遺跡もそれらのうちのひとつで、ニツ岩遺跡から3kmほど岬先端に向かったところを流れて段丘を開析する無名の小川の南側に位置している。本遺跡は、網走市字美岬国有林保安林(101林班り小班)内に所在するように、広葉樹を主体にする巨木が生い茂っている。樹齢を推定しても、近代以降、この地域に開拓の歴が下ろされたことはないようだ。従って遺跡そのものも搅乱を受けている様子などは現地表面では認められなかった。

3) 発掘調査の方法

遺跡地の座標系は、基準点1と2を結ぶライン(座標北方向)のY値が628.15m、基準点1のX値が9,524.21mである。調査区は、この座標軸を基準に設定することにし、基準点1を原点とした(第2図)。

地表面のササを刈り取ると、南西から北東方向に3箇所の窓みが、隣接する状態でとらえられた。それを南西に位置するものから順に1号～3号と名付けた。1、2号は差し渡し6m程度の隅角で四角な、3号は4×2mほどの梢円形の窓みであった。1、2号を擦文時代の窓穴と予測し、調査を始

めることにした。

まず両豎穴を貫く南西～北東ラインを設定し、1号豎穴ではさらにこれに直行する軸を設定し、ここに土層観察用の畔を残して4分割の状態で掘り下げる。また2号豎穴に対しては、1号豎穴との関係を考える上での資料を得るために部分的な調査にとどめた。遺跡を含む地域の基本的な層序は次のとおりである。第1層：黒色土表土（腐植土層）。層厚約15cm。遺跡が所在する場所は、明治以降の開墾などが及ばなかったため、表土の人为的な搅乱がない。海岸段丘でありながら、広葉樹の巨木が生い茂っている。第2層：黄褐色粘土。層厚約30cm。第3層に近づくところでは小砂利をまじえる。第3層：灰黄色粘土。非常に堅く、段丘の基盤になっている。豎穴の底面はこの第3層に達している。

2 1号豎穴

1) 遺構（第3図）

3か所のうち平面方形を示す一番南西側に位置する1号豎穴を全面的に調査することにした。ササの根などとともに表土を除去した後、豎穴中央付近では10cmほどで床面に達してしまうほど段土は薄かった。段土は黒色ないし黒褐色系で単純な様相を示していたが、窪み中央付近の黒色土中では豎穴が埋まる過程において吹き寄せられた白色がかかった火山灰が薄く広がっている様子がとらえられた。豎穴床面は灰黄色粘土層に達していて堅かった。

窪み北側に立ち木があり一部掘り上げることができなかった部分があるが、豎穴は一辺が約5.5m、平面が正方形を呈する。旧表土から60cm程度掘り下げるところが豎穴床面である。粘土層を掘り下げているため壁面の立ち上がりはしっかりとらえることができた。周囲の壁とも崩れた様子などはなかった。床面中央付近とそれから1mほど離れた場所に焼土が確認された。規模はいずれも小さく、豎穴床面の粘土がわずかに焼けて赤褐色を示すといった程度である。柱穴と思われるピットは、壁面から1mほど中央寄りの床面に3個検出した。南東側の中央部の壁にはカマドと思われるものが認められ、豎穴外に約1mほど延びる煙道があった。壁際にはカマドに使用したと思われるレキが固まって出土し、焼土と炭化物がまじった状態の土が小規模ながらとらえることができた。

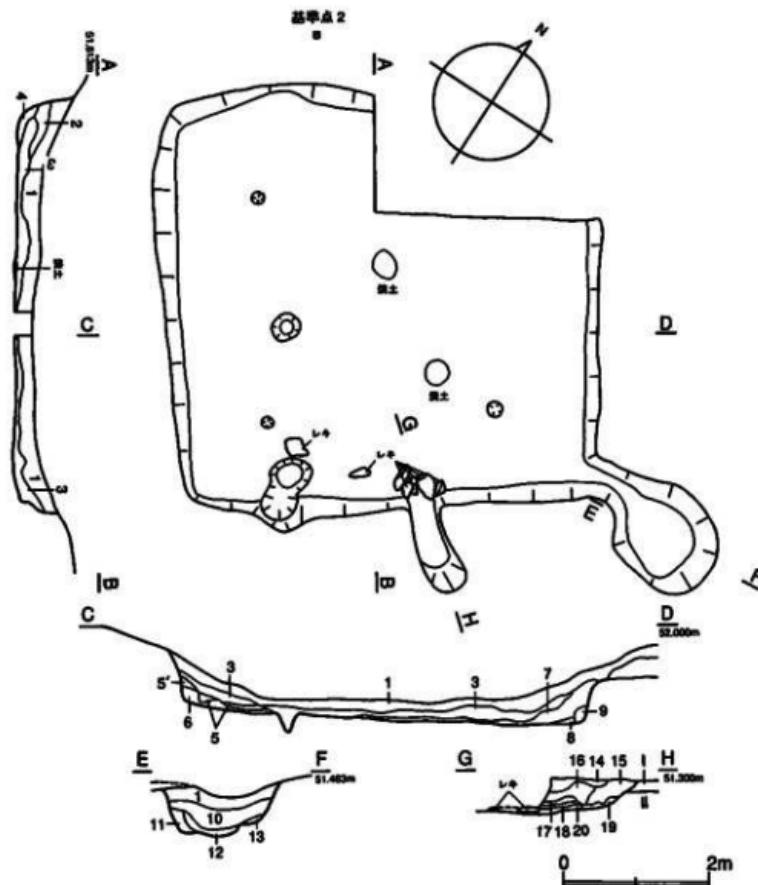
以上のような調査で得られた情報から、1号豎穴は擦文時代の豎穴式の住居跡と判断できたのであるが、これに土坑が付随しているという点で、この時代の住居跡としては特異な存在といえる。土坑の存在は、掘り下げる以前に現地表面から窪みとして捉えることができていたもので、調査の結果、地表面（上端）の径が1.5mにも満たない、底面がボウル状の土坑であることが判明した。土坑の底面レベルは、住居跡のそれとほぼ同一の値を示し、豎穴本体の東壁隅に断面V字状の溝で連結している。土坑、V字状の溝とも、段土状態は自然に埋まった様子を示していた。

（青柳文吉）

2) 出土遺物

土器（第4図1～3・8・9：段土、4～6・10・11：床面出土、7・12：東側遺構）

1：胴部下半から底部を欠く大型深鉢で口径は26.4cmを測る。内面は部分的に黒色化している。口



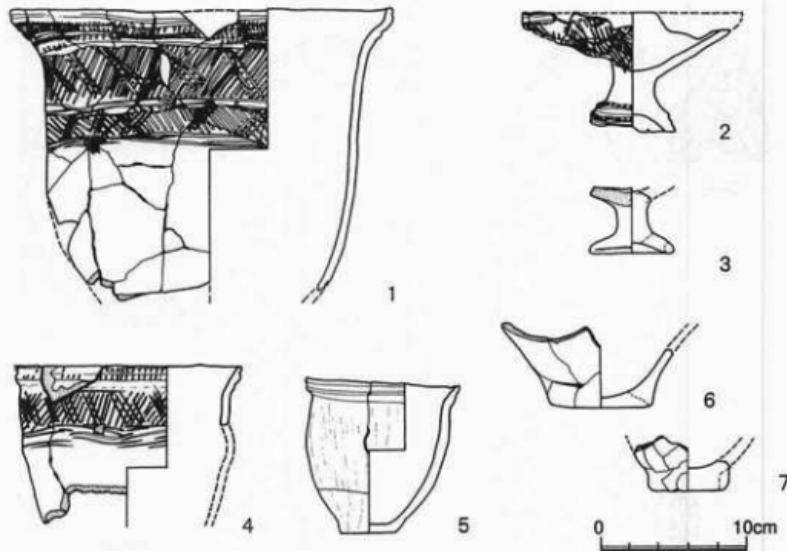
- | | |
|------------------------|-------------------|
| 1 黒色粘土 | 11 黒褐色土 |
| 2 黄褐色土 | 12 黄褐色土 |
| 3 黄褐色土（粘土粒と山砂利含む） | 13 黄褐色土 |
| 4 黄褐色土（山砂利を多く含む） | 14 疣状黄褐色土 |
| 5 黄褐色土（黑色土+粘土、砂質） | 15 黄褐色土ブロック+黑色土 |
| 5' 黄褐色土（黑色土+粘土、しまりがない） | 16 黄褐色土 |
| 6 明褐色土（未付近では山砂利混じる） | 17 疣状褐色粘質土 |
| 7 黑色土（黑色土+黄褐色土） | 18 黑色土 |
| 8 黄褐色土 | 19 黑色土 |
| 9 黑褐色土（黒の崩れ） | 20 疣状褐色土（底面に炭化物） |
| 10 黑色土 | I 疣状褐色土 II 黄褐色粘質土 |

第3図 美岬4遺跡1号竪穴実測図

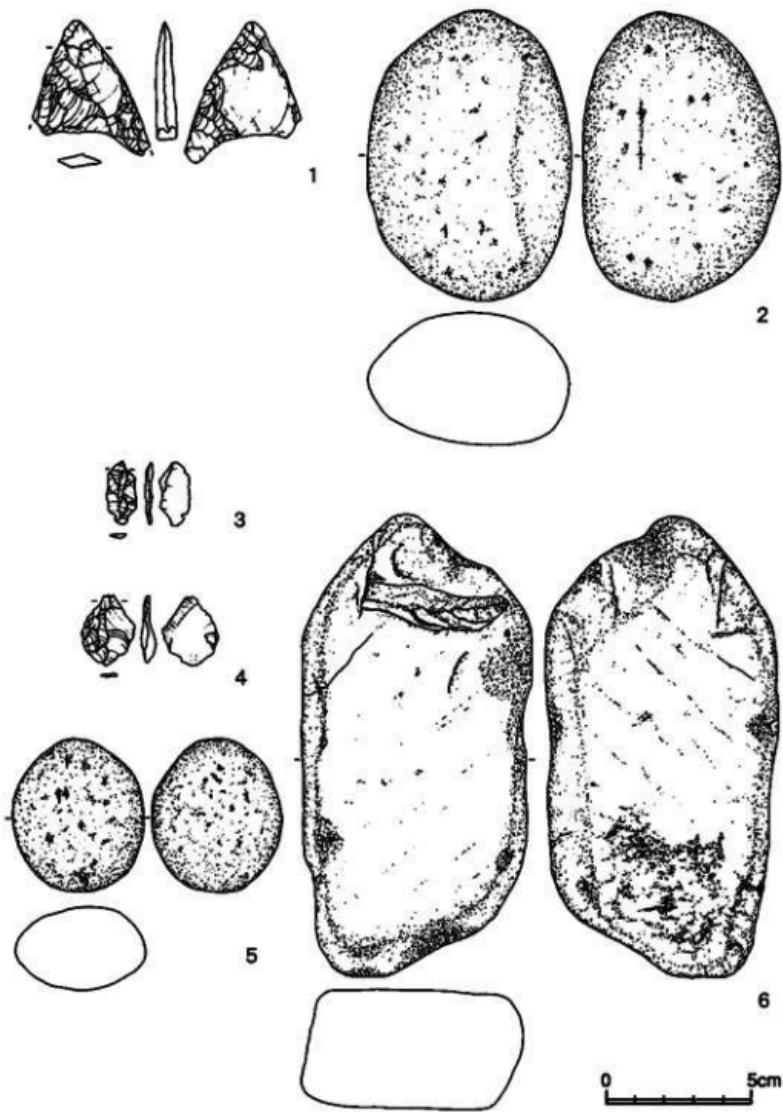
縁部の隆起帯上に2～3段の羽状刻文が施される。文様はいわゆる複段文様で、上段の格子目文、横走沈線、下段の格子目文、横走沈線というように上から順に施文されている。格子目文は上下段ともに、左下がりの斜め刻線文を全周に施した後、右下がりの斜め刻線文を間隔をあけて3本ずつ引いている。横走沈線も部分によって増減があるが、3本を単位としている。文様は全て同一の施文具によるものである。調整は口縁部内面と口唇部に横方向のヘラ磨き、胴部内面は縦方向のヘラ磨きが施される。文様が施された部分の口縁部横方向になでつけられ、胴部文様帶とその下部は縦方向に擦痕がみられる。カマド付近から出土した。表土をはぎ取る最中から破片が出土しはじめ、床面付近までの黒色土中から出土したため、一応覆土からの出土として取り上げている。2：口縁部の大部分を欠く高坏で、口径は推定で15cm、器高8.2cm、底径5.8cm。胎土に大量の砂を含むのが特徴である。杯部内面は黒く丹念に調整されている。杯部外面の文様は底部から口縁部方向8本単位で刻線文を引いた後2～3本単位のハの字の刻線文を重ねてある。また口縁部の立ち上がりの下部には、脚部の2段で羽状に施されているものと同じ短刻線文が1列施されている。脚部には縦方向の擦痕がみられる。出土状況は1の深鉢と同様である。3：高坏の脚部で、内黒の杯の底部が脚についている。胎土は小レキを含む。これもまた1の深鉢と同様の出土状況である。4：胴部下半から底部を欠く中型の深鉢で、口径は15.4cmを測り、床面上から出土した。内外面ともに多少の炭化物の付着がみられる。口縁部には隆起帯上に2列の短刻線文がめぐるが、部分的に1列になる。胴部文様は左下がりの斜め刻線文を全周に施した後、2本または3本を1単位とする右下がりの斜め刻線文を引き、その下に4本前後の横走沈線で文様を区画している。調整は内面口縁部付近は横方向、その下は縦方向のヘラ磨き、外側は胴部に縦方向の擦痕がみられる。5：小型の無文土器で、口径10.5cm、器高10.7cm、底径3.6cmを測り、床面上から出土した。口縁部は2本の不明瞭な隆起帯をもつ。外面は粗いヘラ磨き痕が縦方向に顕著にみられ、炭化物が付着している。内面は口縁部は横方向のヘラ磨き、胴部は縦方向のヘラ磨きが施されている。6：底径6.9cmの深鉢底部で、床面から出土した。7：深鉢の底部で底径は4.7cm。1号竪穴東側造構から出土した。8：高坏の口縁部破片で、内面は黒色、内外面ともに横方向のヘラ磨きが施されている。9：口縁部無文の深鉢の破片で、内面は黒色、横方向のヘラ磨きの痕が顕著である。10：深鉢口縁部で床面から出土した。3～4本が1単位の刻線文による鋸齒状文が部分的に2段にわたって施される。11：深鉢口縁部でわずかに外反するものである。文様は口唇部外面に刻文が1列施され、その下がすぐ文様帶となる。文様は左下がりの斜め刻線文を全周にめぐらせ、そのうえに右下がりの斜め刻線文を3本単位で重ねた格子目文が3段施されていると思われる。内面は黒色で、内面と外面の文様帶下は横方向のヘラ磨きがみられる。12：高坏杯部破片で、5本単位の刻線による鋸齒状文が粗く施文されている。杯内面の黒色化はみられない。1号竪穴東側造構出土。以上の擦文土器片は全て宇田川洋による編年（宇田川1980）の後期に含まれる。

石器（第5図1・2：覆土、3～6：床）

1：無茎石錐で覆土から出土した。黒曜石製。2：擦り石で覆土から出土した。安山岩製。3・4：リタッヂドフレークでともに床面から出土した。黒曜石製で剥片にごく簡単な加工を施し、石錐状に作っている。5・6：擦り石とともに安山岩製で床から出土した。
(稻垣はるな)



第4図 美岬4遺跡1号竪穴出土土器



第5圖 美峯4遺跡1號堅穴出土石器

3 2号竪穴

1) 遺構（第6図）

2号竪穴に対しては、1号を貫く南西～北東ラインに沿って1m幅のトレンチを設定して調査を行った。さらに、このトレンチに直交する方向にも一部区域を拡張して調査を行った。この2号竪穴とした窪みは、1号の北東側に5mほどの幅の盛り土（竪穴構築時の揚げ土）を挟んで隣接しており、その北側は段丘端であり数m先で深い沢に向かっている。表土面から見たところでは、ふたつの竪穴を示す窪みは隣り合って並ぶように存在しており、床面の高低差は約60cmである。

部分的な調査ではあったが、次のようなことがおおまかにとらえられた。

壁の立ち上がりは急で、表土除去後15cmほどの深さで確認できた竪穴床面は、1号竪穴寄りでは旧地表面から50cmほど掘り下げた粘土中にあり、全体は堅くしまっている。

土層断面と窪みの観察から、南東側でやや不規則であるが平面が方形ないし台形を呈する竪穴とすることはできる。南東側の壁で2箇所のカマドを示す焼土があり、付近からカマドを構成していたとみられるレキと擦文土器深鉢土器が出土した。床面中央付近に焼土があった。これらのことから、1号竪穴同様、擦文時代の竪穴住居跡であると判断された。

（青柳文吉）

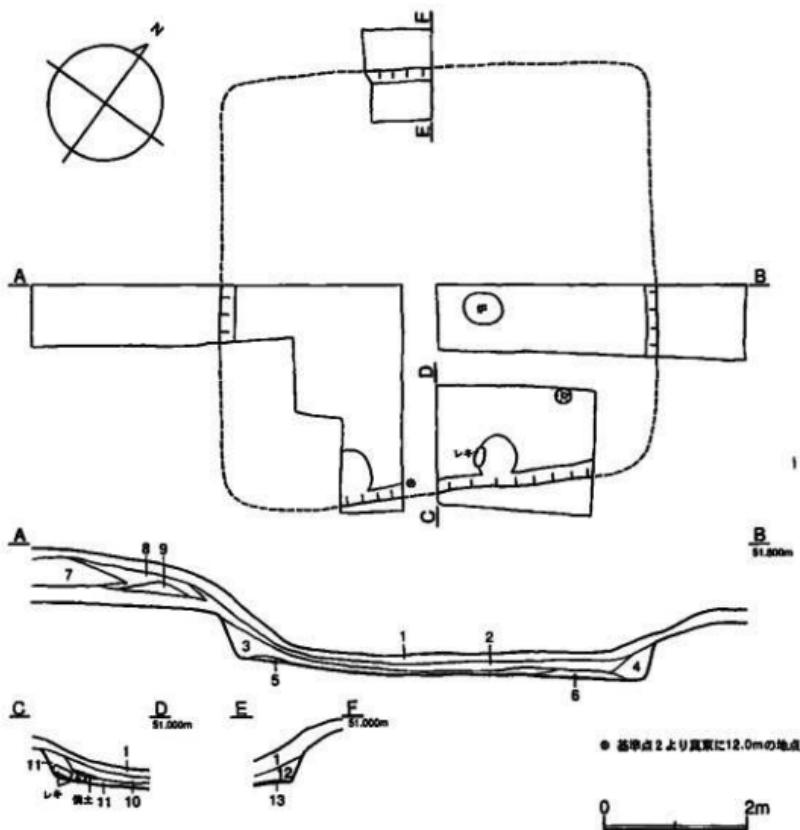
2) 遺物

土器（第7図1・2・4：床、3：壁）

1：ほぼ完形に復元できた大型深鉢で、口径32.3cm、器高39.2cm、底径7.2cmを測る。口縁部の隆起帯上に3段の羽状刻文が施されている。施文具と考えられる木片の痕の跡がかなり明瞭に残っている。胴部文様帶はいわゆる複段文様で、上段の格子目文は左下がりの斜め刻線文を全面に施し、その上から4本単位の右下がり斜め刻線文を施している。下段は横走沈線を10本位ひいた上から、3本単位の鋸齒状と縦の刻線文を組み合わせて施していく。文様帶下部には左下がりの短刻線文列がある。施文はすべて同一の施文具によるものである。口縁部内外面と胴部上半内面は横ヘラ磨き、胴部下半内面には縦ヘラ磨きが施され、胴部外面は擦痕がみられる。東よりのカマド付近から出土した。

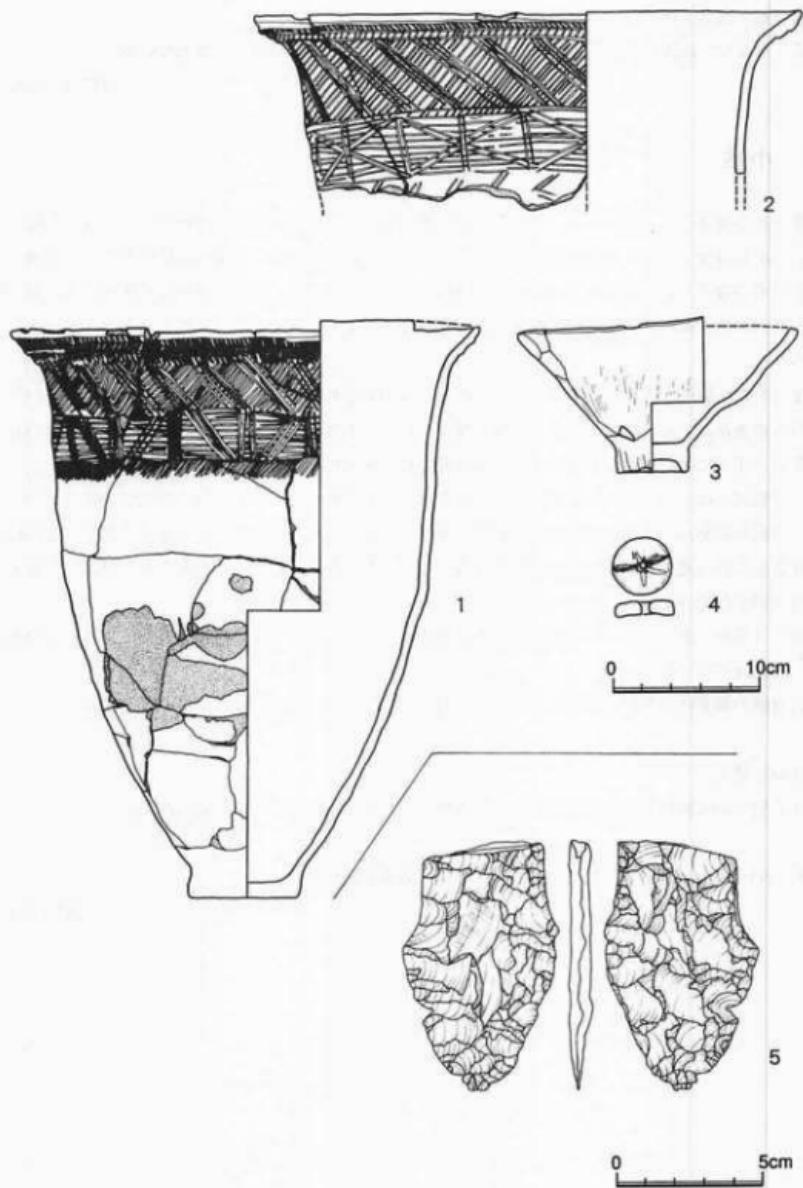
2：胴部文様帶以下を欠く大型深鉢で、口径37.8cmを測る。1の深鉢とほぼ同様の大きさと思われる。口縁部には隆起帯上に2段の羽状刻文をもち、胴部文様帶は複段文様で、上段は図7-1と同様である。下段は10本くらいの横走沈線を施した後、2本単位で間隔をあけて縦の刻線文をひき、その間に斜め刻線文を組み合わせて引いている。文様帶下部には間隔をあけて横向きのハの字に2本単位の短刻線文が施される。口縁部内外面と胴部上半内面は横ヘラ磨き、胴部外面は擦痕がみられる。

3：無文の杯で、口径は19.0cm、器高10.6cm、底径4.8cmを測り、えぐられて高台がつくりだされた底部が特異な例である。口縁部内外面は横向方に、杯部は縦方向に丁寧なヘラ磨きが施されている。胎土は多少の砂を含み、他の擦文土器との違いはみられない。壁から出土した。4：床面出土の土製品で、その形態から紡錘車であろうが小ぶりである。直径4.0cm、厚さ1.0cmを測り、中央の穴の直径は5mm位である。中央から放射状に先の丸い施文具によると思われる浅い刻線文が4本施されている。無文の杯については問題が残るが、2点の擦文大型深鉢はともに宇田川編年後期に含まれる。



- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1 黒色段土（ササ根が生いる） | 8 暗茶褐色土（黒色土+黄色粘土） |
| 2 黒色土（山砂利混じる） | 9 暗褐色土（レキ混じる） |
| 3 黄褐色土 | 10 黒色土 |
| 4 黄褐色土 | 11 黄褐色土 |
| 5 黄褐色土 | 12 暗黄褐色土（レキ混じる） |
| 6 暗褐色土（鐵土・炭化物混じる） | 13 暗褐色土 |
| 7 黄褐色土（山砂利・堆山の土混じる） | |

第6図 美岬4遺跡2号堅穴実測図



第7図 美岬4遺跡2号竪穴出土土器・石器

石器（第7図5：床、6：カマド）

5：ナイフで床面直上から出土した。黒曜石製。基部と刃部の一部が欠損している。

(鶴垣はるな)

4 小括

覆土及び揚げ土の状態から1、2号竪穴間の構築時における時間的な差を捉えることはできなかつた。しかしながらとも1号竪穴構築時の揚げ土の流れ込みの様子は、地形的に低いところに立地している2号の覆土では確認されなかつた。両竪穴では、平面規模、旧地表面から掘り下げた床面の深さ、竪穴の軸方向、さらに床面で検出された炉跡やカマドの位置などがほぼ似たようなあり方をしている。

1号竪穴に隣接するように認められた土坑は、断面V字形の溝で竪穴東角の床面に連結していた。溝は人の通路にできるような規模ではない。土坑も溝も特にこれといった特徴のないものである。床面に発生する水を逃がすために設置した「施設」なのであろうか。

2号竪穴では、このような付属施設のようなものは見られない。しかし竪穴の北側角の盛土部分に多少の瘤みがあることを現地表面から観察できだし、地形図からも読みとくことができる。これは竪穴床面から沢へ通じる溝の存在を予測させるものである。やはり住居内になんらかの原因で発生する水を逃がすための工夫と考えられる。

また3号竪穴としたものは平面が梢円を呈することから、1、2号とも様子を異にするものであるが、詳細は不明である。

当遺跡の調査による出土遺物は土器397点、石器7点、フレーク59点、レキ15点である。

年代測定結果

1号竪穴から採取した炭化物を用いて年代測定を実施、次のような値が得られた。

1,060±110 years B.P. (KEEA-107) 半減期5,568年

(青柳文吉)

1 調査の概要

1) 調査に至るまで

能取岬における考古学的な調査の2年次目である。能取岬先端付近に位置する能取岬西岸遺跡を調査することとした。

本遺跡については、右代啓視・西本豊弘はかつて、「オホーツク文化では道東部で少ない刻文土器を出土する竪穴住居址を伴なう遺跡であること、波蝕、風蝕により徐々に失われていく遺跡である」と紹介している（右代・西本1983）。

平成6年度に実施した分布調査は、右代・西本の調査・報告からすでに10年以上経過していた。崖面には遺物が散乱している状態をとらえることができたが、あきらかに自然崩落により遺跡はさらに削られているように感じた。分布調査後、遺跡が自然現象によって消滅してしまう前に、なんとか全面的な記録保存が出来ないかどうか検討を行った。しかしこのような点で調査の着手には困難が生じることが予測された。

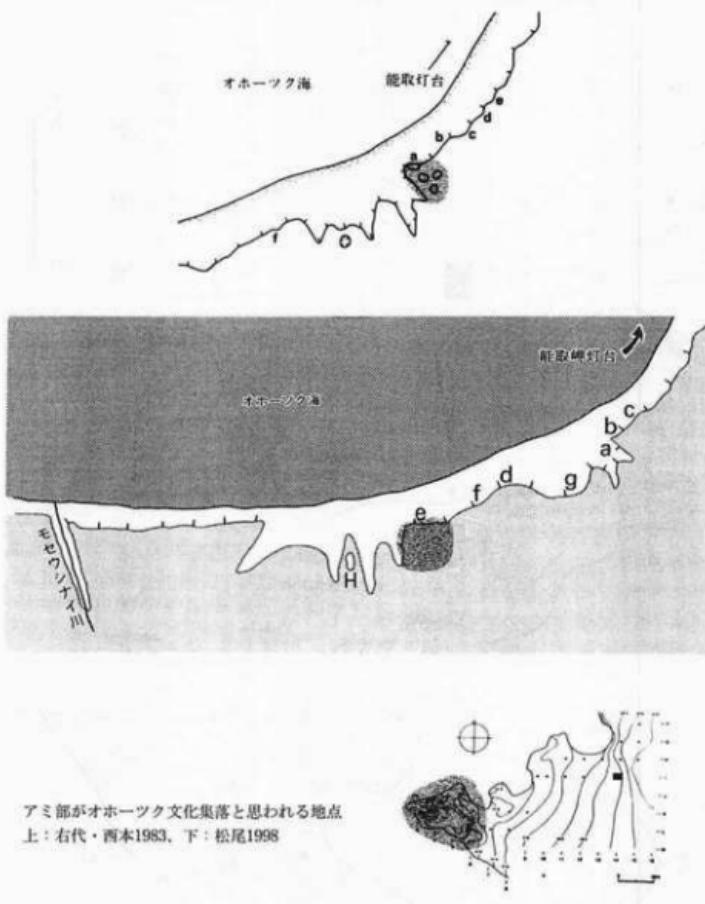
- 1 遺跡保護に関する具体的な手立ては、保護すべき遺跡が立地する地元市町村が主体とならざるを得ない行政システムであるが、地元ではその機が熟していないようであること。
- 2 仮に調査が可能となったとしても、調査の後どのように現地を維持するか。つまり腐植土を取り除くことによって遺跡やその周縁の土地が崩落しやすくなり、それに対処する方法はあるか。
- 3 とくに問題となるのは土地の所有に関することである。遺跡が主として存在するであろう段丘縁辺は、土地台帳に所有者が記載されていないわゆる「脱落地」であること。

記録保存を行おうとした場合の《障害》については時間をかけながら解決を図ることにし、平成8年度の調査では、右代らがなし得なかった遺跡の広がりをとらえることに主眼を置き、将来の全面調査の際に役立つ資料作りを行うことにした。

本遺跡が立地する一帯は美岬4遺跡同様、網走国定公園内に含まれることから、調査を行うにあたって公園を管理する北海道網走公園事務所と数回にわたって協議をかさねた。その結果、調査時期の設定に制限が設けられたものの、公園事務所は当館の調査に理解を示されて多大な便宜を図ってくれた。感謝申し上げたい。また今回の調査では、東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設助手の熊木俊朗氏の全面的な協力を得ることができ、また地元網走南ヶ丘高等学校教諭松尾隆氏の協力もあった。記して感謝申し上げる。

2) 遺跡の立地と自然環境

能取岬東岸の段丘縁辺を北上する道道網走公園線は、岬先端近くになると岬を巡り西岸の能取湖畔に出る道路と岬最先端に向かう道路に分かれる。（第1図）それまでは林の中を走ってきたものがここに来て急に視界が開ける。岬先端の能取岬灯台に向かう道路右手には市営美岬牧場がある。道路左手は、かつては牧場としてまた耕作地として利用されていたということであるが、現在は荒蕪地となっている。市営牧場と道路を挟んだ隣接地は、かつては周辺同様に森林で覆われていた時代があったのであろうが、荒蕪地においてさえ今は1本の立木すら見あたらない。それほど自然の回復が容

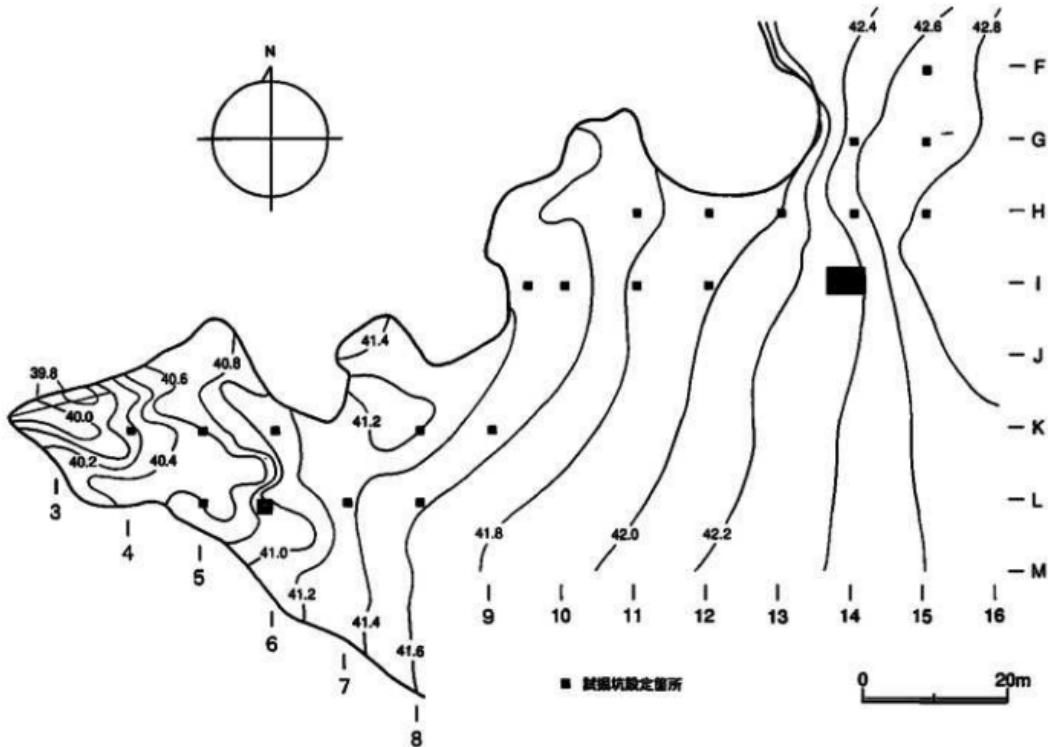


第8図 能取岬西岸遺跡オホーツク文化集落地点の対照図

易でない地域であることを物語るのである。

能取岬西岸遺跡は、能取岬灯台から西へ直線距離にして約1km離れた段丘縁辺に位置する。遺跡が存在するあたり一帯は、かつて畑や草地、放牧地として利用されていた土地で、段丘縁辺（崖ぎわ）まで開墾されていたと思われる名残も認められる。そのようなことが表土の流出や段丘縁辺の崩落を招く一因となったのであろう。岬西岸の前浜で漁をしていた漁業者の網に、オホーツク文化の遺跡から出土する長球形レキに穿孔した「石錐」がかかり、当館に届けられたということもあった。遺跡の崩落は徐々にではあるが、確実に進行しているため問題は深刻である。

第9図 能取岬西岸道路地形図および試掘坑設定箇所



崖の断面に遺跡がとらえられる区域の台地上の観察からは、はっきりした竪穴の存在を予測することは出来そうにない。しかし現地表面が示す等高線はきわめて狭い範囲であるが、不自然な在り方をしていることは確かである（第9図）。

本遺跡の南側は海に面した深い沢が形成されており、これを隔てた馬の背状のやせ尾根の先端部に一辺が10mほどの平面四角ととらえることが出来る竪穴が1箇所ある。西岸遺跡とは目と鼻の先に位置するが、詳細は不明である。
(青柳文吉)

3) 調査研究史

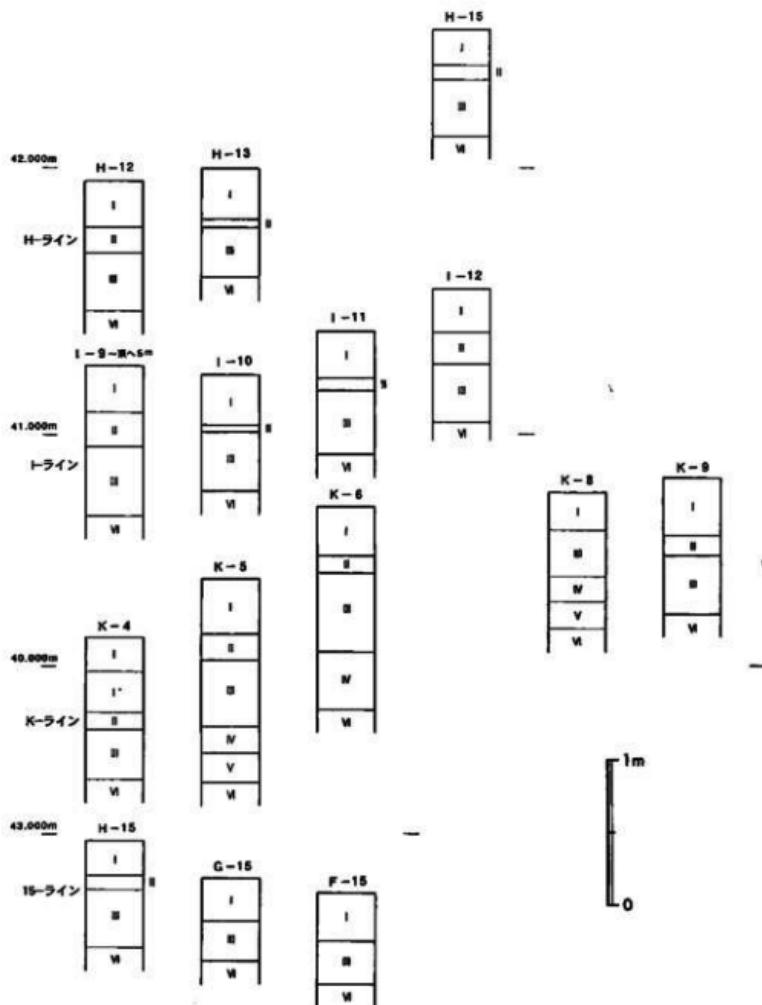
本遺跡の発見は1982年のことであり、右代啓視・西本豊弘の両氏が、1983年の「北海道考古学」誌上において「能取西岸遺跡」として報告したのが初出である（右代・西本1983）。この際には、本遺跡の時期が縄文中期及び続縄文～擦文・オホーツク文化期の各期にわたること、道東では希少なオホーツク刻文期の竪穴住居址が存在すること等が報告された。統いて同じ1982年には北海道教育委員会が網走地域の一般分布調査を行い、本遺跡を登録番号I-01-60、「能取岬西岸遺跡」として登録している。1983年には戸部千春氏が、オホーツク海に注ぐ沢の西岸部分においてチャシの塙と縄文中期の遺跡を確認し、ピラウッルオマナイチャシとして報告している（戸部1983）。その後1998年には、松尾隆氏によって本遺跡の現状についての報告がなされている（松尾1998）。

これらの各報告にはそれぞれ本遺跡の範囲と、遺物・遺構確認地点が略図で明記されているが、その比較対照は崖面の崩落が刻々と進行中なこともあって容易ではない（第8図）。右代・西本両氏の報告および北海道教育委員会の調査カードでは、遺跡の範囲はオホーツク海に注ぐ沢の東岸になっており、我々も当初、両氏の示した遺跡略図が沢の東岸を示すものと考えていた。しかし、松尾氏の報告中で「H」地点として示されている塙みを我々が確認した後、右代・西本両氏の報告との対照を行ってみると、両氏の示した遺跡略図は沢の両岸を示している可能性が高いことが判明した。戸部氏も、氏の確認したピラウッルオマナイチャシの「右座」部分が両氏の「f」地点（鉄錆出土地点）に相当することを述べている。以上のことから、松尾氏が「H」地点として示した塙みは、右代・西本両氏の示した略図内に一点単独で示された塙みに該当すると思われ、右代・西本両氏の示した「a」地点が我々の竪穴確認地点、すなわち松尾氏の「e」地点付近に相当すると考えた。すなわち、我々が新たに確認したと考えていた松尾氏「H」地点の塙みは、すでに右代・西本両氏の略図に記載されていたことになる。

次に問題になるのは本遺跡の範囲である。戸部氏はピラウッルオマナイチャシの範囲について、沢で三分された3つの崖すべてを含めて考えている。そのように考えるならば、沢の両岸を一つの遺跡として一すなわち本遺跡の範囲を沢の西岸部分まで拡大してとらえるのが妥当であろう。今回の試掘調査は沢の東岸部分に限定したが、今後さらなる試掘調査等によって遺跡の広がりを正確におさえが必要があるだろう。

4) 調査の方法

調査はオホーツク海に注ぐ沢の東岸部分を対象に、10mのグリッドを設定して実施した。グリッド



第10図 能取岬西岸遺跡土層柱状図

の南北方向をアルファベット、東西方向を数字で示し、グリッドの名称は各グリッドの北西隅の杭で表示することとした。なお本遺跡は国土座標系X III系にあり、X=11507.210をグリッドのI-ライン、Y=-659.390を15-ラインとしてグリッドを設定した。

分布調査は、これらのグリッドに従い、1m×1mの試掘坑を人力で掘り込む方法で行った。試掘坑の設定地点は、段丘の海岸線を基本に、崖の崩落面で遺物が多く認められたG-13グリッド付近と、豊六らしき窪みが数カ所認められたK・L-5~7グリッド付近を中心とした。試掘坑の設定箇所はグリッドの北西隅を基本としたが、地形や遺物・遺構の出土状況によって設定箇所や試掘坑の大きさを変更した。なかでも1m×1m以上の大きさの試掘坑が2箇所あるが、L-6付近の試掘坑は整穴と思われた窪み付近を確認する意図を持って設定したものである。一方、I-14付近では博物館事業の「体験発掘」を行う目的で試掘坑の拡張を行った。なお、試掘坑の具体的な設定箇所は第9図に示した。

2 調査の結果

1) 基本層序

試掘範囲内の、土層の基本的な堆積状況は下記のとおりである（第10図）。

I層：表土・耕作土層。灰褐色砂質土層で、小砂利や現代のゴミなどを含んでいる。なお、I'層としたのは、K-4グリッド付近にのみ認められた、より色調の暗い砂質土層である。

II層：黒褐色砂質土層。砂をより多く含み、小砂利が混在する。

III層：黒色砂質土層。遺物包含層であり、鍵層となる。地点によっては、炭化物・骨片などのまとまりが層内部に薄い層を形成しており、生活面としてとらえられる。なおこの生活面はオホーツク文化期のものであると思われる。生活面の上下からも遺物が出土する。

IV層：黒褐色土層。赤色がかった小砂利を含む。K・Lラインで認められる。無遺物層。

V層：灰褐色土層。K・Lラインで認められる。無遺物層。

VI層：灰黄色粘土層。いわゆる地山。

なお、I-ラインの西側寄りの部分では地下水位が低く、地山まで掘り下げた際に」層下部まで湧水が認められた。

2) 遺物・遺構の分布

遺構は、L-6付近の試掘坑内でオホーツク文化刻文期の整穴住居址を確認した。この住居址に関しては後述する。他に、K-4グリッドの試掘坑内で、Ⅲ層中に、黒色土の落ち込みが北東方面に向かって認められた。落ち込みの状況から見てK-4の北東部に整穴住居址が存在すると思われるが、落ち込み確認時点で掘り下げを中止したので詳細は不明である。

他に、Ⅲ層内で遺物集中部ないし炭化物・骨片等の生活面が認められた試掘坑は、I-9、I-11、K-5の各グリッドである。

次に調査区内の遺物出土状況についてみてみよう。試掘坑内の土器の出土状況を示したのが第1表

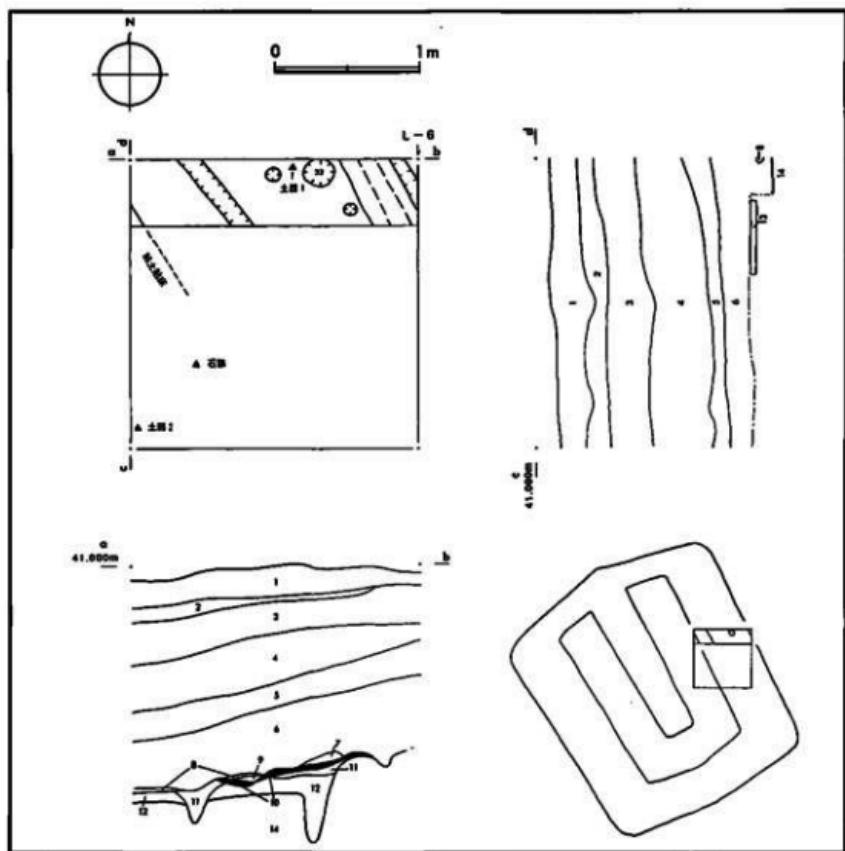
である。時期別に見ると、縄文文化期・統縄文文化期では、土器分布に特に粗密が認められない。オホーツク文化期では、住居址の確認されたL-6付近から、段丘の先端部、西北西方面にかけて土器の出土が多い。おそらく、集落の広がりはこの辺りと見てよいであろう。K-4グリッドで確認された竪穴もオホーツク文化期のものである可能性が高い。擦文化期では逆に発掘区の北東部、G-H-Iラインの方から土器が少量出土し、段丘西側先端部ではよりわずかの出土となる傾向がある。

3) 造構 (L-6付近竪穴住居址・第11図)

次にL-6付近で確認された竪穴住居址について、調査の経緯から述べる。試掘前に現状の地形を観察したところ、J-5グリッド南東部、L-6に近い部分で窪みが認められたため、竪穴住居址の存在を予測し、試掘を行うこととした。試掘坑の設定にあたっては、窪みの中心部を避け、L-6から西へ2m、南へ2mの位置に方形に定めた。地表から1.5mほど掘り下げるとき試掘坑北西隅付近でオホーツク文化住居址の貼床と思われる焼けた粘土の広がりが確認された。今回の調査では住居址の発掘が主目的ではないので床面の保護を優先することとし、試掘坑北部の幅40cmほどの部分のみ、床面下まで発掘を行って住居址の様相を確認した。試掘坑内のその他の部分については、床面直上までで発掘を中断した。

本試掘坑内の層位は第11図に示した。

- 1 : 表土・耕作土層 (前述のI層に相当)
 - 2 : 褐色砂質土層 (I'層に相当)
 - 3 : 黒褐色砂質土層 (II層に相当)
 - 4 : 褐色砂質土層。3層よりさらに砂を多く含み、水分が少ない。小砂利が混在する。
 - 5 : 黑褐色砂質土層。炭化物等を含む黒色土ブロックが混在する。
 - 6 : 黒色土層。湿り気が多く締まりが悪い。炭化物・骨片を多く含み、遺物を多く包含する。III層の一部と関連する層であろう。
 - 7 : 焼土層
 - 8 : 炭化物を多く含む黒色土層
 - 9 : 黑色土層。6とほぼ同じ特徴。
 - 10 : 炭化物・炭化木材の層
 - 11 : 黄褐色の粘土ブロックを多く含む黒色土層。竪穴床面 (使用面) に該当すると思われる。
 - 12 : 黄褐色の粘土ブロックが少量混在する黒色土層。竪穴床面 (使用面) に該当すると思われる。
 - 13 : いわゆる粘土貼床。焼けており、赤化・硬化している。
 - 14 : 灰黄色粘土層。いわゆる地山 (VI層に相当)。
- 床面 (使用面) の直上で炭化物・炭化木材の薄い層が確認された点、粘土貼床が被熱して赤化・硬化している点から見て、住居使用時か、住居廃絶後まもなく、使用面が露出している状態で本住居址は火を受けたものと思われる。注目すべきは床面直上の炭化物・炭化木材層の「上部」に焼土が認められる点である。屋根の上、ないしは周囲に土盛りをしていた可能性が考えられる。ただし、セクション面で観察された状況から見た限りでは、盛土はそれほど厚くはないようである。



第11図 L-6付近堅穴住居址実測図および住居址プラン等想定図（右下）

試掘坑内で確認できた住居内施設について、西側から解説しよう。まず試掘坑内北西隅付近に粘土の貼床が検出された。確認されたのは貼床の縁の部分であり、その延長は第11図右上に示したように北西—南東方向に向かっている。貼床の東側約60cmの部分には、幅約15cm、床面からの深さ約25cmの溝が貼床とほぼ平行の方向に確認された。この溝は堅穴の床面（使用面）から掘り込まれている。その東側には、直径約10cm、床面からの深さ約14cmの小ビットが2箇所、直径約20cm、いわゆる「掘り形」からの深さ約32cmのビットが1箇所検出された。2箇所の小ビットは床面から、もう一つのやや大きなビットは「掘り形」面から掘り込まれている。ビット東隣では幅約32cm、「掘り形」からの高さ約34cmの形状で、先の溝・貼床とほぼ並行に、地山部分がテラス状に盛り上がっていた。おそらく住居構築に当たって掘り込みを行った際、この部分をテラス状に残して掘り込みを行ったものと思わ

れる。ただしこのテラス状の部分は、住居址床面（使用面）とはあまり高低差が無いため、住居使用時にはテラス状の形態は目立っていないかったと考えられる。このテラス状の部分のさらに東側には幅約10cm、深さ約6cmの溝がやはりテラス・貼床等と平行に検出された。試掘坑の範囲がこの溝部分で終わっているため、溝のさらに東側の部分の様相は確認できなかったが、おそらくこの東側の溝がオホーツク文化住居址に一般的に見られる、壁際の溝に相当するのであろう。この溝の東隣に近接して、住居址の壁の立ち上がりが存在する可能性が大きい。

以上のように確認された住居内施設のあり方を参考に、住居址のプランについて考察してみよう（第11図右下）。まず、貼床及び壁際の溝の延長方向から見て、住居址の長軸は、南北方向から西に約30度程度回転した北西—南東方向であろう。次に住居址の向き、コの字形の粘土貼床の開口方向であるが、海に向かって傾斜する地形と、オホーツク文化住居址の一般的な例から考えて、海に向かって開口している可能性が高いであろう。以上の点と、試掘坑内で確認された壁から貼床までの長さを勘案して、参考までに住居址プランを想定したのが第11図右下である。この図は、長軸9m、短軸7.5mを想定しているが、むろん正確な根拠があるわけではない。

なお、床面ないし床面直上の遺物で本住居址に伴うと考えられるものは、遺構平面図（第11図左上）上で土器1（第14図12）、土器2（第14図2）、石鏃（第15図2）と記載した3点である。土器1は刻文期の土器であるので、本住居址の時期も刻文期とみてよいであろう。

（熊木俊朗）

4) 遺物

土器

第Ⅰ群土器（第12図1～6）

本群は縄文時代に属する土器のグループである。

第1類（第12図1～5）

縄文時代早期の東鋼路式系土器にふくまれるもの。どれも胎土が非常にもろく、多量の砂を含んでいて、表面の風化・磨滅が著しいものがある。1：口縁に3本の組紐文4列をめぐらし、その下にRLの「短縄文」が1列施されている。組紐文の列上に刺突文が加えられている。2：口唇にRLの「短縄文」、口縁に3本の組紐文4列が施文される。3：口唇にRLの「短縄文」、口唇直下外面に爪でつけたような縱の刻みがあり、その下にRLの「短縄文」が施される。4：脇部破片で、3本の組紐文3列とRLの「短縄文」が施される。5：脇部破片で、RLの「短縄文」が施されている。

第2類（第12図6）

縄文時代前中期～中期初頭に位置付けられる平底押型文にふくまれるもの。1点出土。6：横走する貼付文から縦に垂下する貼付文と櫛齒状の押型文をもつ。

第Ⅱ群土器（第12図7～12、第14図12）

本群は主に統縄文時代に属する土器のグループである。

第1類（第12図7・8）

縄文時代晩期末から統縄文時代初頭に位置付けられるもの。7：地文にRLの斜行縄文をもつ。口

唇に大型突起、その角に丸い施文具による刻みがあり、口縁にはO Iの突瘤文が約1cm間隔で施文されている。8：口縁にI Oの突瘤文が約1cm間隔で施され、その下に沈線文が波状に引かれている。さらにその下にL Rの縄文が縦に施文されている。

第2類（第14図12）

後北式に含められるもの。今回は底部1点のみ出土した。底面が上げ底になっている。

第3類（第14図9～12）

北大式に含められるもの。9：胸部破片で、横走する微隆起線から縦に約5mm間隔で微隆起線が垂下する。北大I式に含められる。10：地文にL Rの斜行縄文をもち、先の丸い施文具によって横・斜めの沈線が施されている。胸部破片で、北大II式に含められる。11：口縁にO Iの突瘤文をもち、地文は反燃のL Sと思われる原体によって施文されている。これも北大II式に含められる。12：口縁部にO Iの突瘤文をもち、その下に先端の鋭い施文具によって縦・斜めの沈線文が施されている。全体的に炭化物が付着する。

第三群土器（第13図1～16、第14図1～11・13～16）

オホーツク土器である。これらを文様によって以下のように分類した。

第1類（第13図1～3、第14図1）

型押文をもつもの。第13図1：4本齒の櫛齒状施文具によって、口縁部肥厚帯のなかほどと下縁に横向きに型押文が施されている。2：1と同様な3本齒の施文具により、肥厚帯下部に施文される。3：円形の先の平坦な施文具によって、肥厚帯下縁に施文されている。第14図1：胸部破片で、上下2本の横走する刻みの浅い刻文列の間を、4本齒の櫛齒状施文具による縦向きの型押文で埋めている。

第2類（第13図4～12、第14図2・3）

刻文をもつもの。図13-4：口縁部肥厚帯の下縁に小さい三角形を呈する刻文列をめぐらし、その下1cm位にも同様に施文している。5：口縁部肥厚帯上に刻文を1列施している。施文は浅い。6：上下2列の刻文列がみられ、上は斜め、下は横に刻文が施されている。外面の炭化物付着が著しい。7：口縁部肥厚帯下縁に斜めの刻文が1列施されている。8：刻文が2列施されているが、全体的に磨耗した印象を受ける破片である。9：口縁部肥厚帯のもっとも肥厚した部分と下縁に横向きの刻文が施されている。外面は炭化物の付着が著しい。10：口縁部肥厚帯の下縁にハの字状に刻文をめぐらしている。11：10同様、口縁部肥厚帯の下縁にハの字状の刻文列と、胸部に同一施文具による横向きの刻文が2列施されている。内外面ともに炭化物が付着する。12：口唇と口縁部下縁に斜めの刻文が各1列施されている。内面に炭化物が付着する。第14図2：斜めの刻文が1列、肩部に施されている深鉢の破片である。3：横向きの刻文が2列、肩部に施されている深鉢の破片である。

第3類（第13図13・14）

沈線文をもつもの。13：横走沈線が1本と、それを挟んで上下に横向きの刻文が2列施されている。ほとんど肥厚していない口縁である。14：13同様肥厚しない口縁部に2本の沈線が施文されている。

第4類（第14図4）

爪形文をもつもの。肩部に斜めに3列の爪形文が施されている肩部破片である。

第5類（第14図5～11）

貼付文をもつもの。5：粘土紐状に刻文を施した弧状の貼付文と、粘土紐を指でひねるようにして波状にした横走する貼付文が施される。6・7・8：粘土紐を指でひねるようにして波状にした貼付文が1本施された肩部破片である。9：いわゆる擬繩貼付文が直線と波線の2本を組み合わせて施されている。10：擬繩貼付文が1本施された小破片である。11：いわゆるソーメン文が2本と、粘土紐を小さな円形にした貼付文が施されている。

第6類（第13図15・16）

無文のもの。15：口唇の形が山形で、肥厚帯下部がやや突出している。道北のいわゆる「沈線文系土器」のグループに含まれるものである。16：幅の狭い口縁部肥厚帯とほぼ直立する頭部をもつ。内外面ともに炭化物が多く付着する。

第7類（第14図13～16）

土器底部。

第IV群土器（第12図13～16）

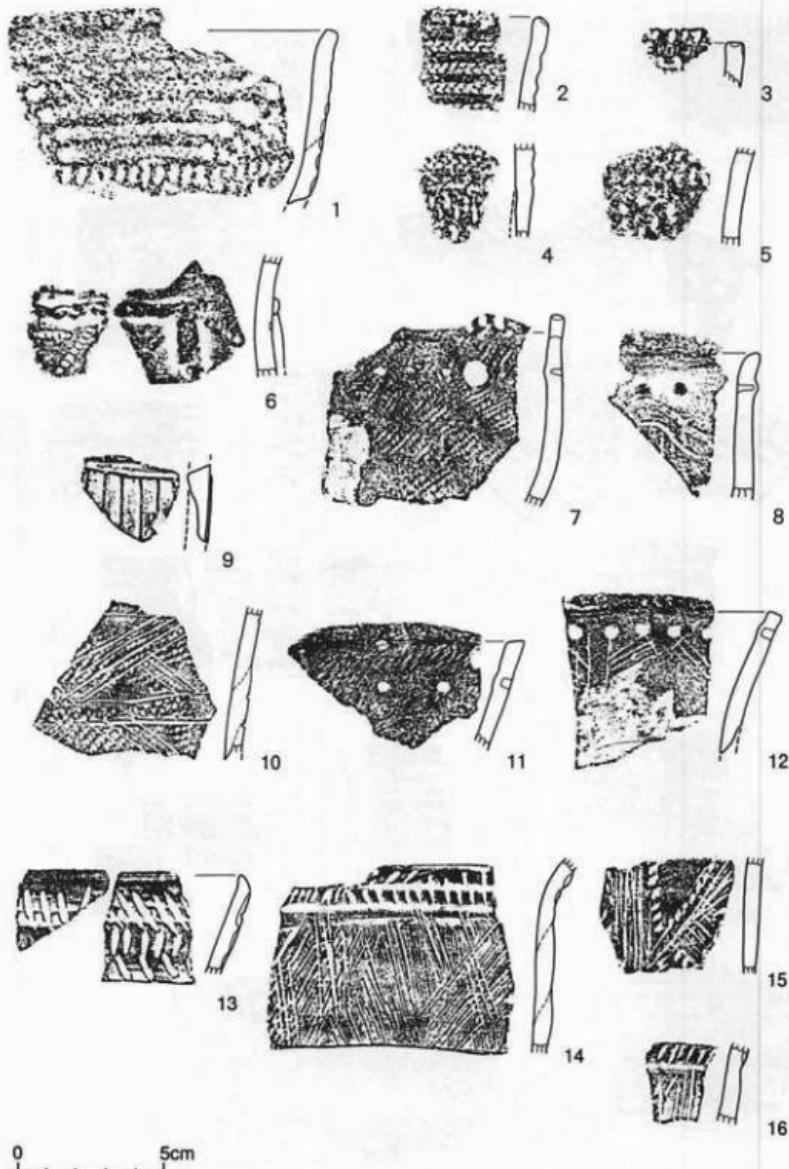
擦文土器である。4点とも文様から、宇田川洋による編年（宇田川1980）の後期から晩期にふくまれる。

13：深鉢の口縁部で刻線文が羽状に3列施されている。内面は黒色を呈する。宇田川編年後期。
14：口唇を欠いた口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部にはやや羽状となる刻文、胴部には粗い施文の格子目文が施される。施文具は先の丸く細いものが用いられ、施文順序は左下がりの刻線文の後に右下がりの刻線文が施文されている。文様帶部分には擦痕が残る。宇田川編年晩期。
15：深鉢胴部破片で、縦、斜めの刻線文で大きな輪廓状文を施し、その縁に列点文をつけた文様をもつ。宇田川編年晩期。
16：深鉢口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部には刻文、胴部には縦、斜めの刻線文が施されるが、文様の全体はよくわからない。宇田川編年晩期に含まれると思われる。

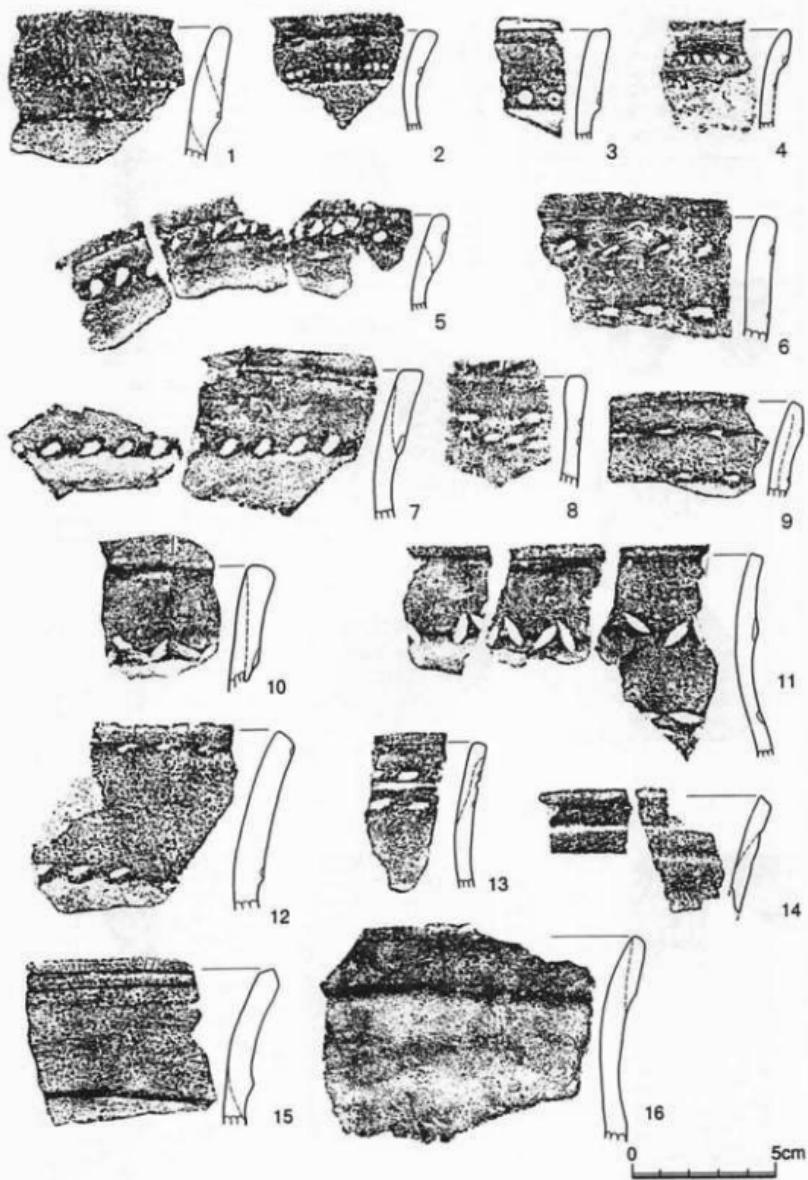
石器（第15図1～16）

1～8：石鏃。3が硬質頁岩製、4がメノウ製のはかは全て黒曜石製である。6・7・8は欠損品である。9：黒曜石製の石槍である。10～13：ナイフ。刃部断面の角度が比較的鋭角となっているもののが含まれている。10は硬質頁岩製で、その他は黒曜石製である。11・12・13は欠損品である。14・15：スクレイパー。刃部断面の角度が比較的鈍角のものを含めている。ともに黒曜石製である。16：リタッチドフレーク。黒曜石の比較的大きな剥片で、原レキ面を残している。全間にわたって粗い加工が施されているが、未製品として考える。

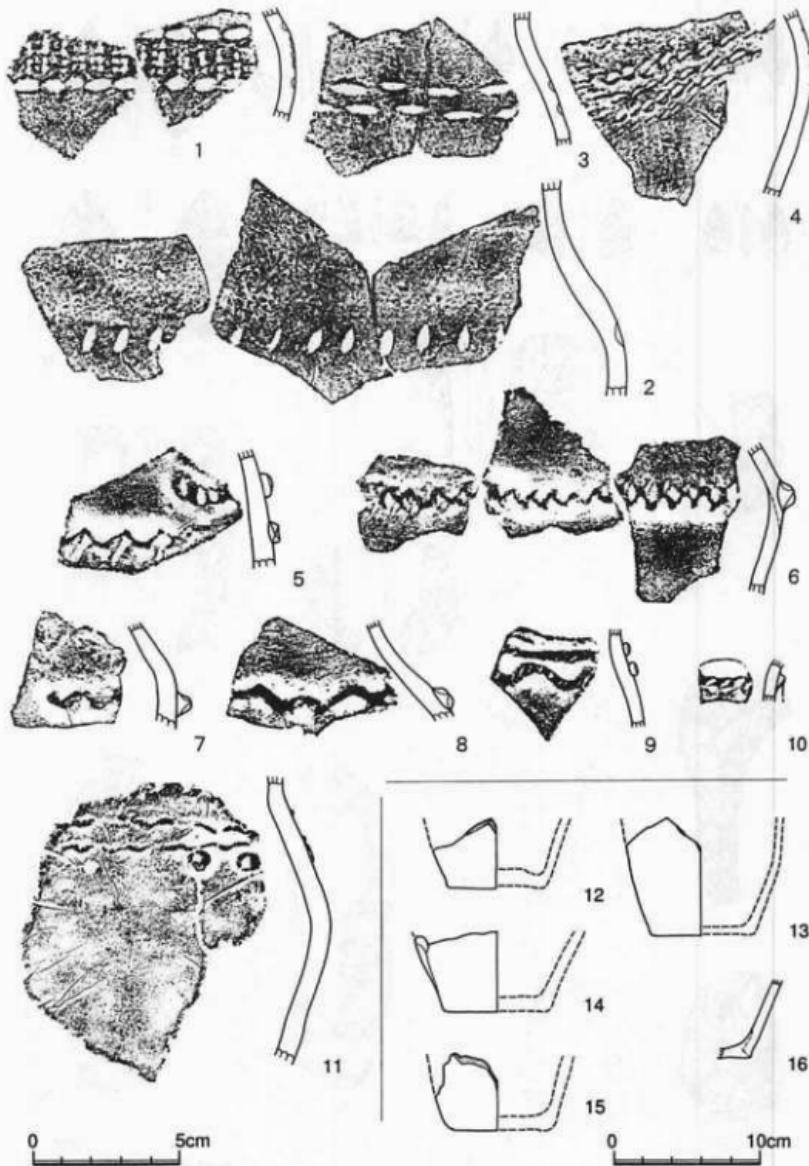
（福垣はるな）



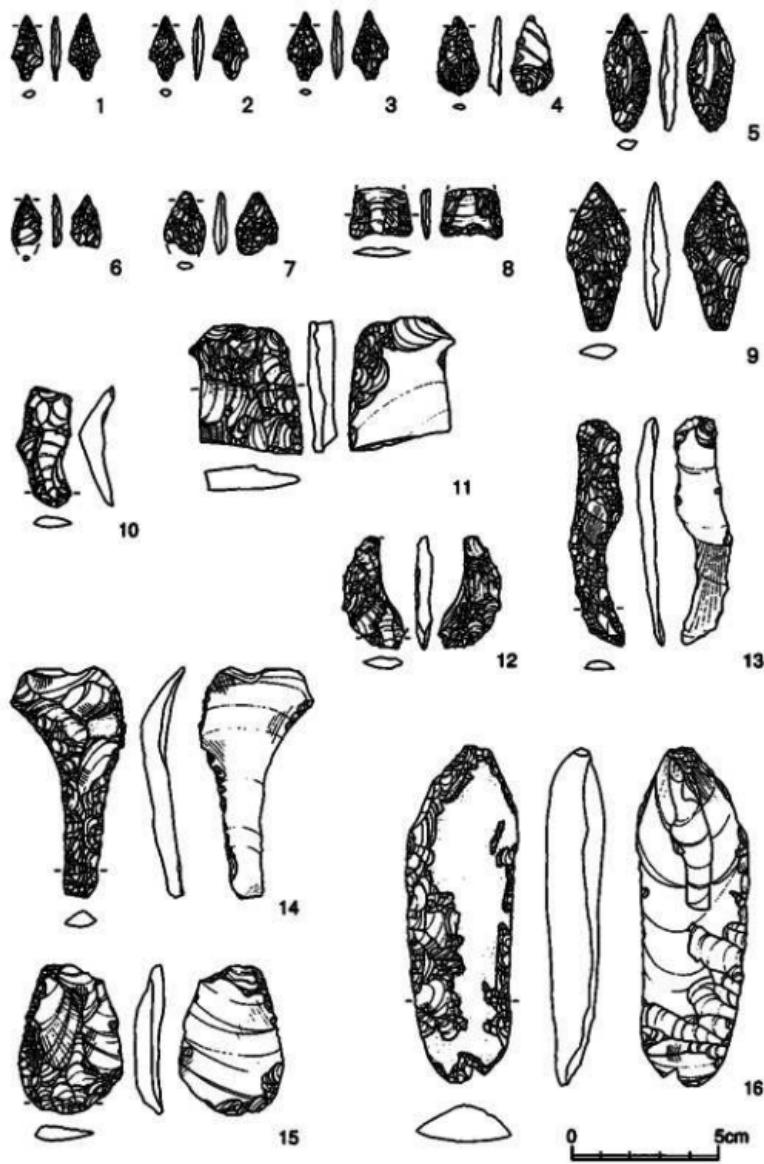
第12図 能取岬西岸遺跡出土土器 (1)



第13図 能取岬西岸遺跡出土土器 (2)



第14図 能取岬西岸遺跡出土土器 (3)



第15圖 能取岬西岸遺跡出土石器

グリッド	縄文	統縄文	擦文	オホーツク	不明	計
G 13		4	5	5	3	17
G 14		2		1		3
G 15		3			3	6
H 11			2			2
H 13	1	1	2		3	7
H 14		2	1			3
H 15		1			1	2
I 09		2	3	2	9	16
I 10			1			1
I 11					4	4
I 12					2	2
K 04	1	9	6	14	101	131
K 05		3		16	88	107
K 06		4		20	108	132
K 08				2		2
K 09		1		2	2	5
L 05		1		9	71	81
L 06	4	2		17	34	57
表 摂	6		1	24	9	40
合 計	12	35	21	112	438	618

第1表 能取岬西岸遺跡 出土土器集計表

3 小括

はじめに本遺跡におけるオホーツク文化期の集落の位置・規模についてまとめてみよう。今回の試掘調査では、オホーツク文化刻文期の竪穴住居址を新たに1軒確認した（以後、2号竪穴と仮称）。右代・西本両氏が本遺跡の崖面で確認した例（以後、1号竪穴）に統いて、2軒目の住居址である。右代・西本両氏の確認した竪穴の正確な位置が不明であるため確定的なことは言えないが、今回の分布調査で確認できたオホーツク文化期の遺物出土状況からすると、1号竪穴の位置は2号竪穴から北西方向の崖面にあった可能性が高い。

右代・西本両氏の略図では1号竪穴に隣接して、3箇所の窪みの存在が明記されている。今回の調査でも同じ地点に窪みのような部分が数カ所確認できた。しかしながら試掘の結果では、住居址の床面は地表面から約1.5mの深さのところにあり、地表面の窪みと竪穴住居址が対応するような状況ではなかった。風などの自然的要因によるものか、耕作等の人为的要因によるものかは不明であるが、いずれにしろ2号竪穴の周辺では竪穴の窪みは厚く土砂で覆われてしまい、窪みの有無から竪穴住居址の存在を想定するのは不可能な状況になっていたわけである。すなわち、右代・西本両氏の確認した3カ所の窪みを竪穴住居址だとする可能性は一旦白紙に戻す必要がある。

では本遺跡には、1号・2号住居址の他に、オホーツク文化期の竪穴住居址は何軒存在するのであろうか。まず竪穴として考えられるのはK-4で見られた黒色土の落ち込みである（3号竪穴）。他にも、K-5、K-6の遺物出土状況から考えて、この周辺にも数軒の竪穴住居址が存在する可能性が考えられる。また、1号竪穴のように、北部崖面にあって崩落してしまったものもあるかもしれない。すなわち、今回の試掘地点には、1～3号に加えて、まだ数軒のオホーツク文化期の住居址が存在する（あるいは、かつて存在した）可能性がある。さらに、松尾氏の略図で「H地点」となっている、沢を挟んだ西岸の部分にある大形の窪みも、形状などから見てオホーツク文化期の竪穴である可能性が高い。なお、これら4軒+αの住居址のうち1号・2号は刻文期の住居址であったが、本遺跡では貼付文期の土器も量的には少ないものの発見されており、他の2軒+αの住居址には貼付文期の住居址が含まれている可能性もある。

オホーツク文化期に関する成果でもう一つ重要な点は、北海道北部を中心に分布する、いわゆる「沈縄文系土器」が少量であるが出土している点である。本遺跡が刻文期の集落である点と合わせて、オホーツク文化集団の道東部への展開や、続く刻文期以後の道北と道東の集団関係を考える上で、本遺跡が重要な意義をもつてゐることがあらためて認識された。

次にオホーツク文化期以外の遺物及び出土状況について簡単に触れておく。まず、今回の調査では縄文早期、縄文前期、縄文晚期の土器が新たに発見された。続縄文文化期の土器としては、いわゆる北大II式の出土が目を引く。道東でもわずかに出土が確認されているオホーツク刺突文系土器（いわゆる十和田式）との関係が注目される。擦文化期の土器は宇田川編年後期以降のものに限られ、しかもオホーツク文化の集落地点とは出土地点が重ならない傾向にあった。

右代・西本両氏、松尾氏の報告のなかでも本遺跡の消失の危機が繰り返し述べられているが、現実のところ1号竪穴は崖面の崩落によってすでに確認できず、残存しているオホーツク文化期集落地点

のK・L-4・5・6地点も、風蝕・波蝕の危機に晒されているのが現状である。道東におけるオホーツク刻文期の集落の希少性・重要性はあらためて述べるまでもない。今回の調査によって、本遺跡の遺構・遺物分布状況、特にオホーツク文化集落の広がりはある程度明確になった。保存・調査計画に際しての基礎的データはそろったと言えよう。今後は、本遺跡オホーツク文化集落地点の保存・調査に関して、早急に検討を行う必要があるだろう。

(熊木俊朗)

1 調査の概要

1) 調査にいたるまで

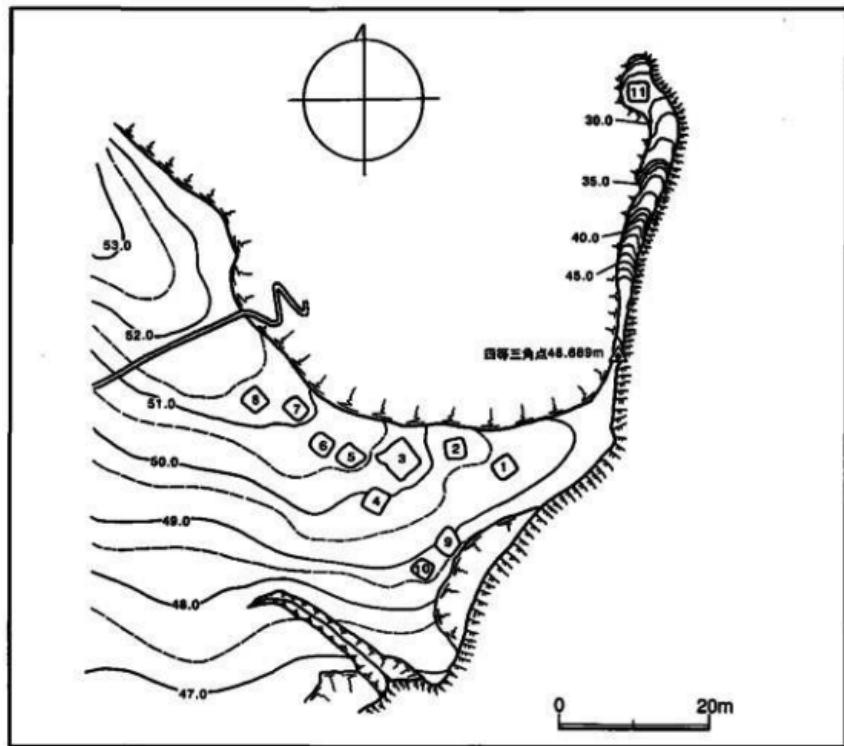
能取岬における考古学的な調査の3年次目である。1年次目は擦文文化の集落を調査し、2年次目はオホーツク文化の遺跡を試掘調査して集落址の存在を確認した。能取岬西岸遺跡の立地においてもみられるように、能取岬のオホーツク海に面した海岸段丘は、オホーツク文化の集落が立地しやすそうな地形である。それにも関わらず、明らかにオホーツク文化の遺跡とされているものは、平成8年度調査した能取岬西岸遺跡のほか、東海岸沿いを南に下ってニツ岩遺跡まで確認されていなかった。そこで両遺跡の間にはほかにオホーツク文化の遺跡は存在しないのかどうか、また美岬4遺跡のような小規模の擦文文化の集落址が能取半島からオホーツク海に注ぐ小沢沿いにないのかどうかを確かめるため、平成6年度に行った網走市周辺の遺跡分布調査の成果も参考にしつつ、特に能取岬東岸において丹念な踏査による分布調査を行った。その結果、ササの生い茂る美岬の国有林中にまだ未登録の遺跡が數カ所確認された。そのうち11カ所の竪穴住居址が残された集落址・美岬5遺跡はこの能取岬の台地上でもNM-11遺跡に匹敵する規模ものである。この竪穴群は1mをゆうに超す丈の高いササに覆われていたために竪穴の形状を確認しづらく、オホーツク文化のものか、擦文文化のものか明確ではなかった。そのため、今回この遺跡の測量調査を行って集落の様相をある程度明らかにした上で、今後の研究に役立てようと考えた次第である。この測量調査にあたっては紋別市立郷土博物館学芸員佐藤和利氏の御指導と多大なる御協力をいただき、また東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設助手熊木俊朗氏の御協力もあった。記して感謝申し上げる。

2) 遺跡の立地と自然環境

ニツ岩遺跡のあたりで海岸から海岸段丘上に登る道道網走公園線は、NM-11遺跡付近まで海岸段丘崖から約50~300mの間隔で平行にのびているが、その道道と段丘崖との間の地帯の国有林は、広葉樹の雜木林となっている。美岬5遺跡はそうした雜木林のなか、海岸段丘がやや海に突き出した部分の段丘崖近くにある。遺跡付近は尾根となり、道道は尾根を切り通してとおっている。また、遺跡のある尾根の北側の沢に沿って、急斜面を降りるつづら折りの小道があり崖下に通じている(第15図左上)。崖下は砂浜となっているが、少し沖の方まで岩礁が続いて、遠浅である。遺跡付近の雜木林内は、背丈を超えるほどのササ藪が続いているが、遺跡の立地する一帯特に海岸より(1号竪穴よりも東側)になるとササはかなりまばらになり、その背丈も低く、非常に海への見晴らしがよい。竪穴1~10号のあるあたりは標高約50m、11号は標高約30mとなっている。11号は1~10号ののっている尾根が、幅を狭めて沢を囲い込むように海沿いにのび、20mほど標高が下がった先端にあり、両側は急な斜面になっている。

2 調査の結果

竪穴住居址は計11カ所確認できた。その結果は第15図の通りである。竪穴群は測量の結果、全てほ



第16図 美岬5遺跡地形図

ば方形を示していることから、この集落址は擦文文化のものと考えられる。ただし、第15図中第3号堅穴はほかの住居址よりも一回り大きく、西側に飛び出る形の窪みが確認された。この付近には倒木も多く、木が倒れて根が抜けたあとである可能性もあるため、この窪みが堅穴住居址に伴うものかどうかは明確ではない。地表面から測った堅穴の窪みの深さは1～10号はほぼ同じで80cm程度、11号はやや浅く、40～50cmで比較的浅いものであった。

3 小括

美岬5遺跡はその堅穴の形状から、擦文文化の集落址と考えられるが、突き出た尾根の先にある11号堅穴をふくめて10軒前後の集落であることから、遺跡の北約2.5kmに位置するNM-11遺跡と同程度の大きさの集落である。当遺跡の位置する尾根の北側には先述のとおり、現在でも人がたまに通っていると思われる小道が沢を通って崖下に通じている。能取岬のオホーツク海岸は切り立った崖に

なっている部分と、沢が流れて樹木が繁茂している部分があるが、後者のようなところには現在でも使われている崖下に通じる道がある。こうした道は、美岬5遺跡の尾根の北の沢の小道のほか、NM-11遺跡付近の美岬キャンプ場から崖下に海岸に通じる遊歩道、美岬4遺跡の南1kmくらいに位置する美岬遺跡付近にもある。NM-11遺跡の場合は集落のある尾根を形成している沢は滝となって崖を流れ落ちているが、道は沢をこえてつづら折りになり崖下に続いている。したがって能取岬の海岸段丘上の集落は標高が50mという高い地点に立地しているけれども、海辺へのアクセスの容易な場所として、沢があり、その沢沿いに植物が繁茂して崖下に通じているところに面している尾根を特に選んでいると考えられる。

海岸段丘崖下の海岸にはアイヌ語地名が残されている。『網走市史』によれば、能取岬は江戸時代、蝦夷地の中でも交通の難所にかぞえられるところであり、網走と能取湖口のノトロ部落の間の交通はバイラギから山道を越えるか、または小舟で海岸沿いを行くかの手段があったという。交通路として海岸沿いを歩いて行くには困難な所であったが、松浦武四郎の『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』第23巻能登呂志には、この近辺の海岸にアザラシ類、アシカ類などの海獣が多く生息することが記されていて、漁場として以外にも海獣狩猟を行うには良い場所であったと思われる。

ここからは全くの推測であるが、交通路として海岸を舟でまわり、漁撈や海獣狩猟を行うにも適した場所とすると、このあたりは古くから人の出入りがあったところであり、そのためにアイヌの人びとも多くの地名を残しているのではないだろうか。また美岬5遺跡を残した擦文文化の人びとともに同様に、海の幸を手に入れるのに適した海岸に通じる沢に近い段丘上を選んで集落を構えたと考えられる。とくに11号住居址は海獣類が崖下に近づいてくるのを見張るにはとても適したロケーションである。

『東西蝦夷山川地理取調圖 十九』にあるこの近辺（能取岬からニツ岩まで）のアイヌ語地名の意味は、『網走市史』所収の「網走郡内アイヌ語地名解」によると以下のようである。

アノマポル an-homa-poru 「我々が・怖れて近よらぬ・洞窟」

ノトロ Notoro 「岬・の所」

ノテツ^{*} Not-etu 「岬の突端の義。シンノノテツ」「本当の・岬・の突端」

オタッコワタラ orak-watara 「崩れ岩」または u-rok-watara 「並んで・坐っている・岩」

サルキウシホロ sarki-ushi-poru 「ヨシ・多く生えている所・の洞窟」

ポンニタッ Pon-nitat 「小さい・湿地」

チャラッセナイ Charasse-nai 「滝をなして流れ落ちる川」

ホビショ Pop-isho 「水中の波かぶり岩」

ポンワタラ Pon-watara 「小さい・岩」

エオルシ E-or-ush-i (一ヨウルシナイ) 「額が・水・についている・所」

ラウネナイ Raune-nai 「深くえぐれている・沢」

レイエウシ Reye-ush-i 「いつも這う所」

ブツ^{*} サルンナイ Putu-sar-un-nai 「その川口に・ヨシ原・ある川」

アノマモイ an-ho-ma-moi 「我ら・怖れて近づかぬ・入り江」

タンネシラリ Tanne-shirar 「長い・平磯」

バイラキワタラ Pairaki-watara 「バイラキ・岩」(二ツ岩)

バイラキ (バエラケクシナイ Pa-e-rake-kush-naiの略)「出崎・の突端・の下の所・を通っている・川」

以上のうち、もっとも岬の突端に近い場所にあり、滝をなして流れ落ちているのはNM-11遺跡の付近を通っている沢であり、現在の地形がこの地名がつけられた当時とほぼ同じであったと仮定した場合、チャラセナイと呼ばれたのはこの沢ではないかと考えられる。すると美岬5遺跡付近の海岸はそれ以下の地名がつけられていた場所のどれかに相当するのだろうが、どれもはっきりとした決め手はない。

(稻垣はるな)



第17図 能取岬周辺のアイヌ語地名 松浦武四郎『東西蝦夷山川地理取調圖』草風館版
(佐々木利和編1988『アイヌ語地名資料集成』別冊草風館)より

まとめにかえて

平成7年度には擦文化の集落址、平成8年度にはオホーツク文化遺跡の発掘調査を行い、平成9年度には能取岬周辺の遺跡をあらためて分布調査したのであるが、この地域は国有林として開発行為による破壊から免れているため、道道網走公園線にかかる部分や風蝕・波蝕による崩壊の危機にさらされている能取岬西岸遺跡を除いては、遺跡が比較的良好な状態で保存されていることが確認できた。

網走には縄文時代早期からの遺跡の存在し、古くから人びとが継続的に居住してきたことは明かであるが、そのことは同時に、遺跡の保護が図られるより以前に、市街地化や鉄道敷設などによって早くから遺跡が破壊されてきたことをも意味する。市街地に所在している遺跡のはほとんどが現在は消滅しているのが現状である。このような状況のなか、能取岬周辺の遺跡群がほとんど手を加えられないままに残っているのは、網走近辺の先史時代を考える上で大変重要なことである。

特に能取岬周辺には、オホーツク文化の遺跡が存在している。モヨロ貝塚からさほど離れていない位置に、現在その存在が明らかにされている集落址だけでもニツ岩遺跡、能取岬西岸遺跡がある。このモヨロ貝塚と能取岬の2遺跡はまず立地の違いで大きく分けられる。それは河口付近の海岸砂丘上のような標高の低い所に位置するものと、海岸段丘上の標高40~50mの高い所に立地するものである。後者は、海岸線に近く標高の比較的低い所に立地する場合が多いオホーツク文化の遺跡としては、非常に標高が高い点で特徴的である。しかし段丘上の平坦な面は、岬沿岸に居を構えるとすれば、眺めも良くこれ以外に適地はない。そこに集落を構える理由は、当時から周辺には海獣類が多く生息していて、海獣狩猟に適した場所だったからであろう。そして同じ標高の高い段丘上に立地するこのふたつの遺跡間の違いは、時期である。ニツ岩遺跡の住居址は貼付文期の土器を伴い、そのことはモヨロ貝塚の住居址と同様である。これに対して、能取岬西岸遺跡で確認された住居址は刻文期の例のみであり、貼付文期の土器を伴う住居址は確認されていない。しかし土器片はいくつか出土しているので、報告にもあるように、まだ集落のひろがりが考えられる当遺跡においては、今後の調査で貼付文期の土器を伴う住居址が見つかる可能性もあると思われる。すると、モヨロ貝塚やニツ岩遺跡との相互の関係がどのようなものであったかを検討することができるだろう。

美岬4遺跡は擦文化の住居址であることが確認でき、その時期は宇田川編年による後期以降であった。先述のオホーツク文化の2遺跡と時期的に重なることはなく、また能取岬西岸遺跡で出土した擦文土器片も、オホーツク文化の集落地点とは重ならないところから出土していく、同じく後期以降のものである。したがって能取岬周辺ではオホーツク文化の人びとが居住し、姿を消したあと擦文化の人びとが集落を構えたのであり、測量調査を行った美岬5遺跡をはじめ、能取岬に所在する擦文化集落と推定できるそのほかの遺跡もおそらく同様であると考えられる。能取岬にはサケが遡上するような河川はないが、集落が位置しているのは全て沢沿いで、海岸に降りることのできる道が近くにあることが特徴としてあげられる。ここからは推論でしかなく、美岬4遺跡の調査結果からはその証拠は得られなかったが、能取岬の擦文化の人びとは、海岸での漁撈や採集のほかにも、オホーツク文化の人々と同様に海獣狩猟を行ったりというように、海洋資源に多く依存する生活を営んでいた。

たのではないだろうか。

今回の3年間にわたる調査において、当館では北方民族に深く関わりがあると考えられているオホーツク文化と、本州文化の影響を受けて成立した縄文文化の遺跡を調査することができた。能取岬における両者の時期は前後したであろうけれども、生活の基盤はともに海にあったと考えができるだろう。そのことと対照的に思われるのが、能取岬における縄文文化の遺跡である。はじめの遺跡の分布の章でも述べたが、能取岬の段丘の海岸よりにはオホーツク文化・縄文文化の遺跡が多く、山側にいくにしたがって、それよりも古い縄文の遺跡が多く確認されるようになる。縄文時代に能取岬に住んだ人びとはあまり海には依存していなかったのだろうか。またこれも興味深い問題である。

平成7年度に調査を行った美岬4遺跡出土の大型深鉢（第15図1）と小型深鉢（第4図5）は現在当館常設展示室第コーナー「海の狩人・オホーツク文化の人びと」で展示を行っている。また平成8年度は小中学生対象の教育普及活動である「博物館クラブ」の一貫として、平成8年6月22日（土）・23日（日）に「発掘体験」を能取岬西岸遺跡において開催した。

（稲垣はるな）

参考・引用文献

秋葉 実

1985 「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌 中」北海道出版企画センター
網走市史編纂委員会

1958 「網走市史 上巻」

右代啓視・西本豊弘

1983 「網走市能取西岸遺跡」「北海道考古学」第19輯

宇田川洋

1980 「7 捜文文化」「北海道考古学講座」みやま書房

河野広道

1958 「網走市史先史時代篇」「網走市史」上巻

大場利夫・大井晴男編

1976 「香深井遺跡」上 東京大学出版会

高倉新一郎編

1978 「竹四郎廻浦日記 下」北海道出版企画センター

武田政治

1987 「網走市タンネシラリチャシ跡発見報告」「モヨロ」No26網走市郷土博物館友の会

戸部千春

1983 「網走市ピラウッルオマナイチャシの分析例」「モヨロ」No12網走市郷土博物館友の会

松浦武四郎

「東西蝦夷山川地理取調圖」草風館版

(佐々木利和編)1998『アイヌ語地名資料集成』別冊草風館)

松尾 陸

1998 「能取岬西岸遺跡」拾遺」「北海道考古学」第34輯

藤本 強

1972 「第二章 常呂下流域を中心とした地域の一般調査と竪穴群の実測」「常呂」東京大学文学部

北海道開拓記念館編

1982 「二ツ岩 北海道開拓記念館研究報告第7号」

北海道立北方民族博物館編

1995 「湧別町川西遺跡～北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査～」

米村哲英・和田英昭

1982 「2. 周辺の遺跡」「二ツ岩 北海道開拓記念館研究報告第7号」北海道開拓記念館
和田英昭・米村 衛

1991 「美岬2遺跡」網走市教育委員会

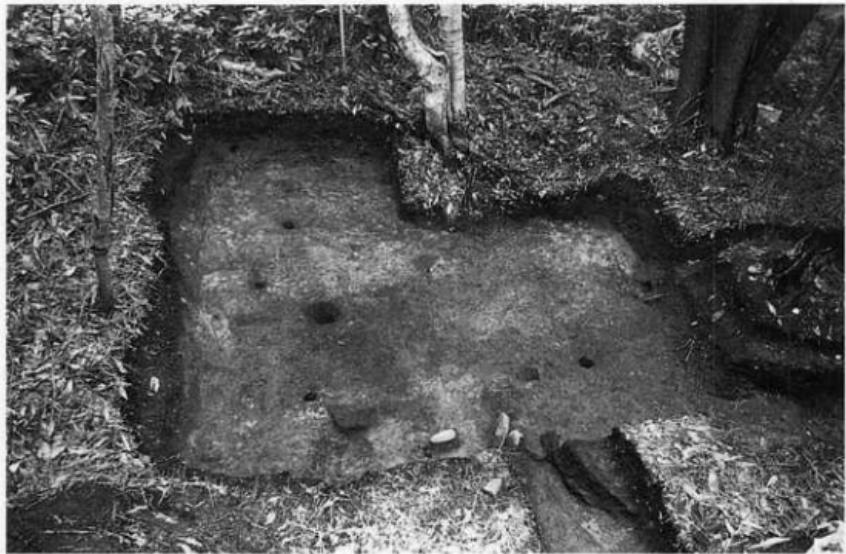
和田英昭・米村 衛

1994 「美岬3遺跡」網走市教育委員会

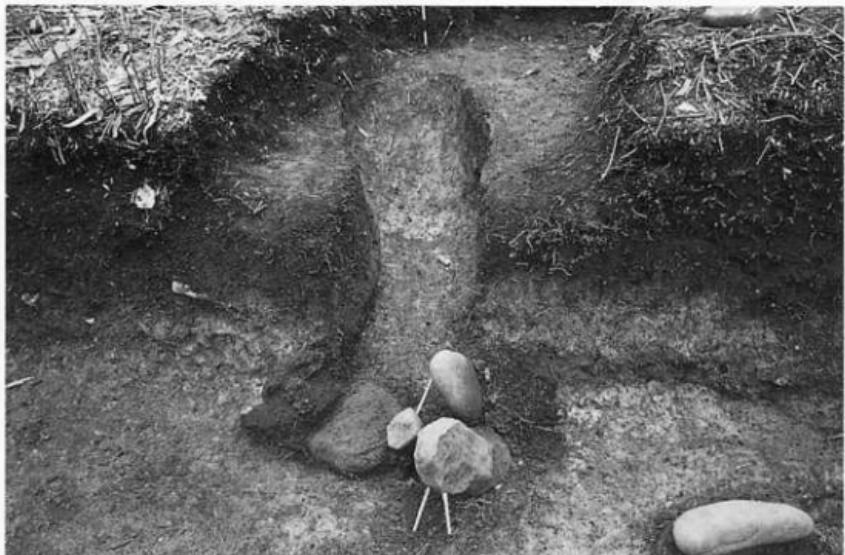
図 版



美岬 4 遺跡 1 号竪穴発掘作業風景



美岬 4 遺跡 1 号竪穴完掘状況



美岬4遺跡1号竪穴カマド完掘状況



美岬4遺跡1号竪穴東側遺構完掘状況



1



2



3



7



4



5



6

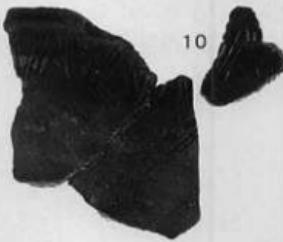
美岬 4 遺跡 1 号竪穴
出土土器(1/4)



8



9



10

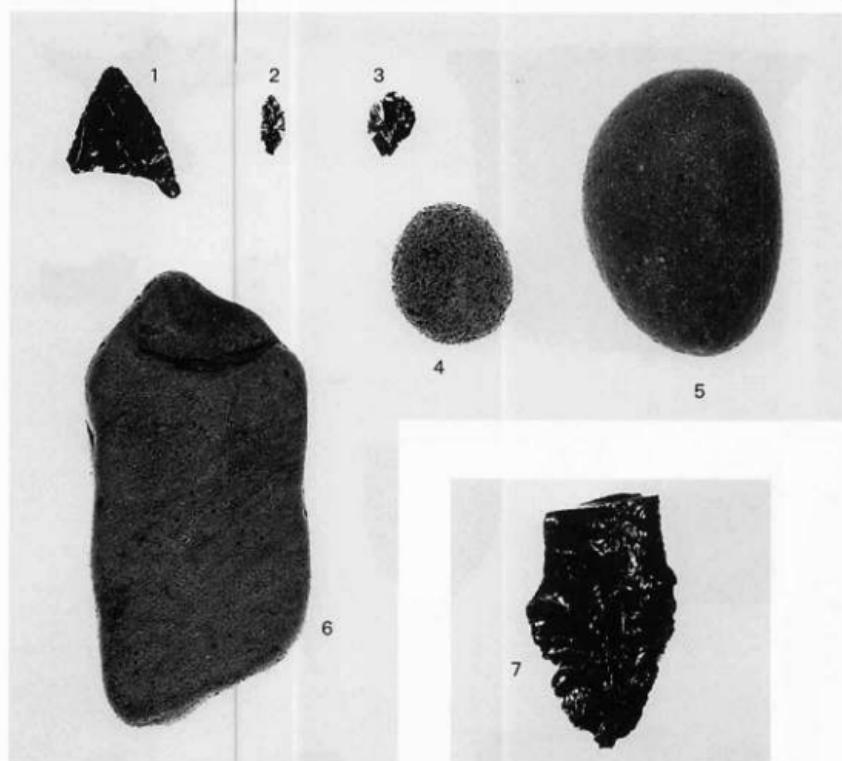


11



12

美岬 4 遺跡 1 号竪穴
出土土器(1/2)

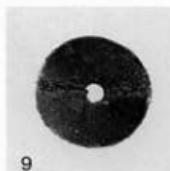


美岬4遺跡1号竪穴出土石器(1/2)

美岬4遺跡2号竪穴出土石器(1/2)



美岬4遺跡2号竪穴出土土器(1/4)



美岬4遺跡2号竪穴出土土器(1/2)



1



2

美岬4遺跡2号竪穴出土土器(1/4)



能取岬西岸遺跡遠景



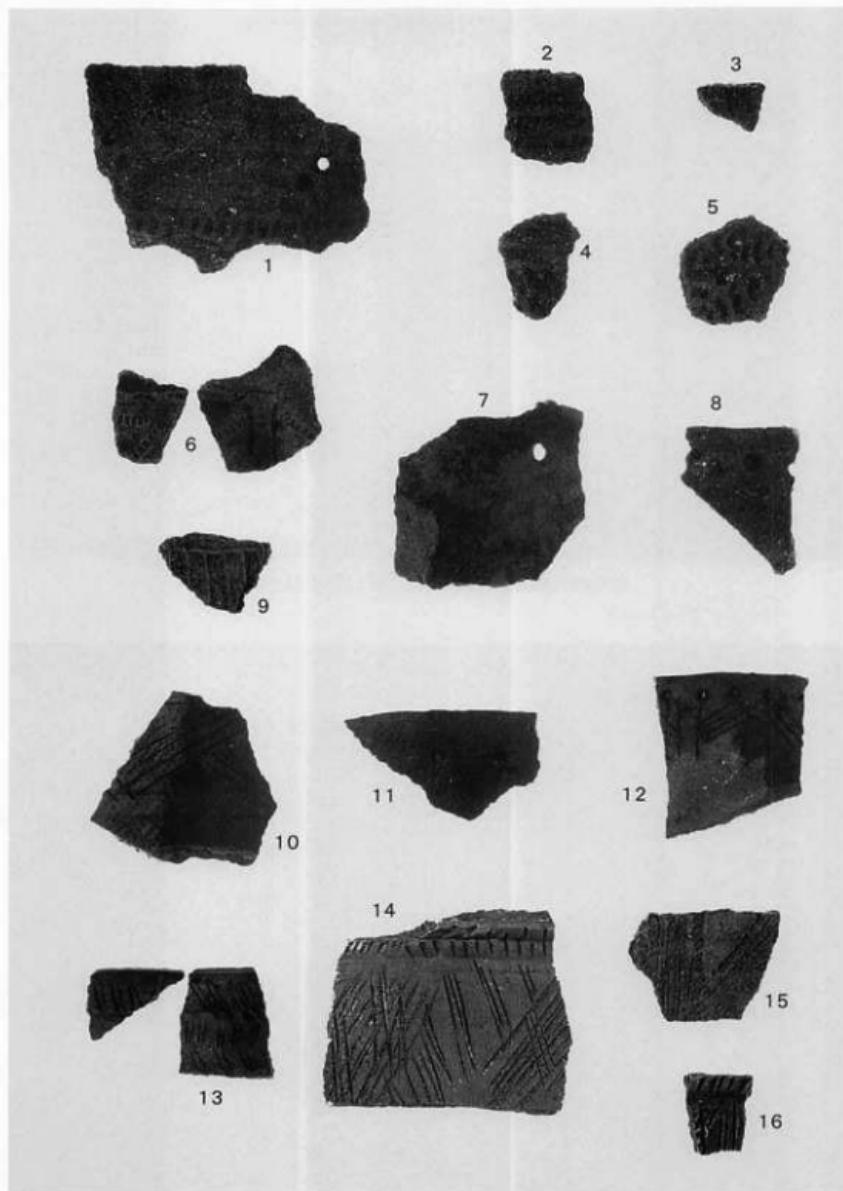
能取岬西岸遺跡発掘風景



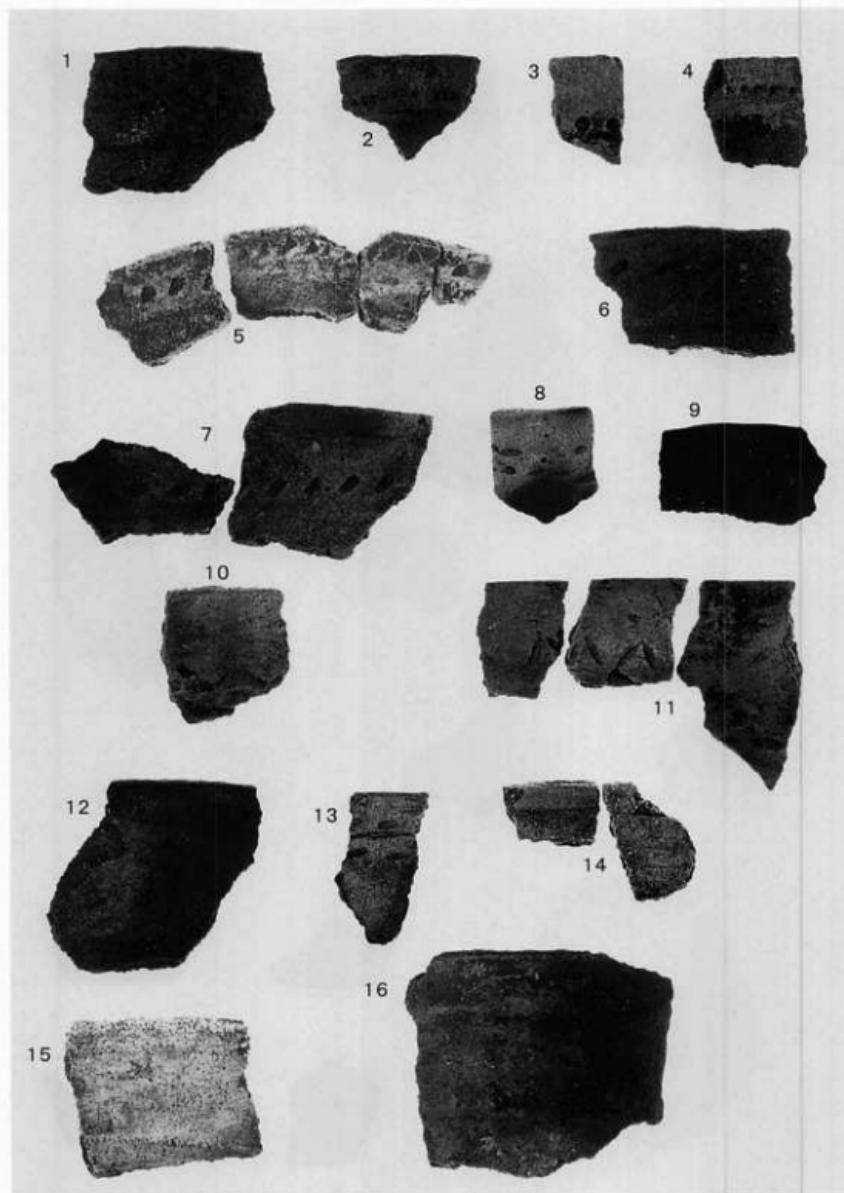
能取岬西岸遺跡 L-6 付近竪穴床面検出状況



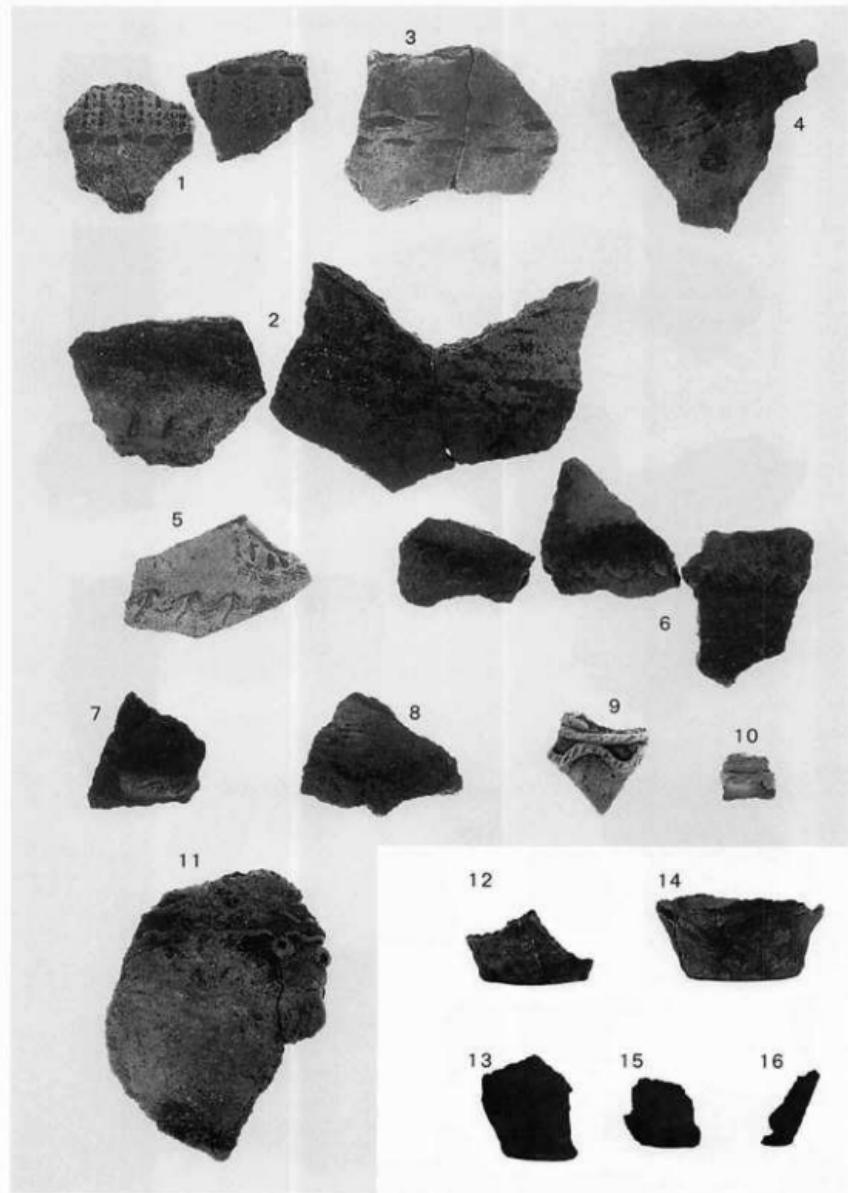
能取岬西岸遺跡 L-6 付近竪穴床面遺物出土状況



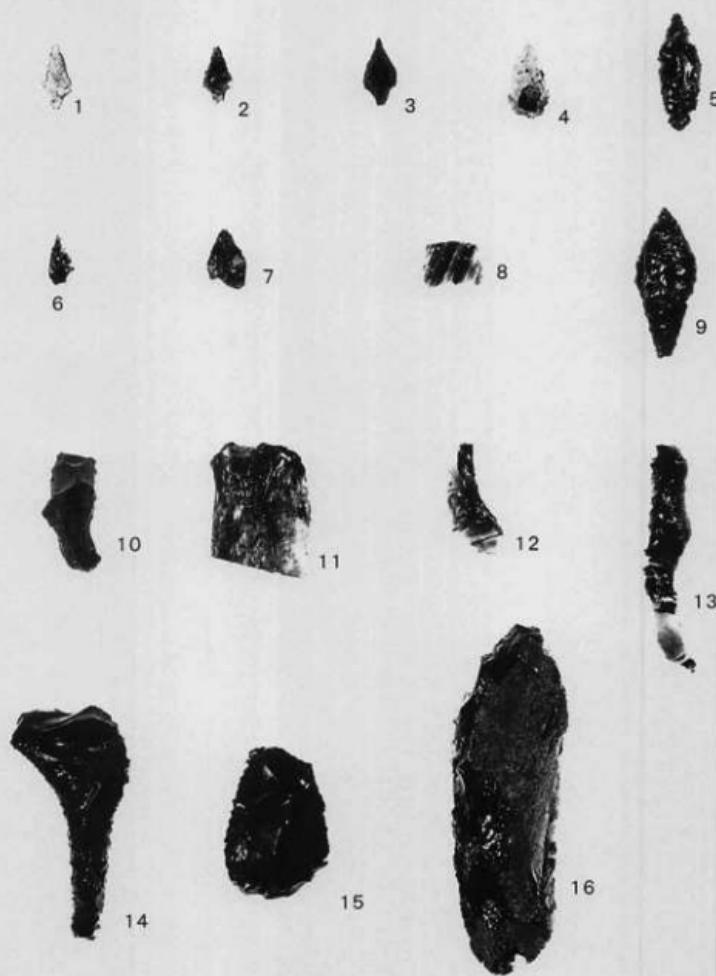
能取岬西岸遺跡出土土器(1/2)



能取岬西岸遺跡出土土器(12)



能取岬西岸遺跡出土土器・胴部(3/4)底部(1/4)



能取岬西岸遺跡出土石器(1)

報告書抄録

ふりがな	のとろみさきしゅうへんのいせき							
書名	能取岬周辺の遺跡							
副書名	美岬4遺跡・能取岬西岸遺跡・美岬5遺跡							
卷次								
シリーズ名	北方民族博物館調査報告							
シリーズ番号	2							
著編者名	青柳文吉、熊木俊朗、稻垣はるな							
編集機関	北海道立北方民族博物館							
所在地	〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査 期間	調査 面積	調査原因	
美岬4遺跡	網走市美岬 国有林内	01211 I-01-137	44° 05' 09"	144° 15' 28"	950815 950905	100m ²	博物館の 調査研究 事業	
能取岬西岸遺跡	網走市能取岬 10番地ほか	01211 I-01-60	44° 06' 13"	144° 15' 30"	960619 960703	80m ²		
美岬5遺跡	網走市美岬 国有林内	01211 I-01-138	44° 03' 57"	144° 15' 31"	971103 971104	600m ²		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
美岬4遺跡	集落	擦文時代	竪穴	土器・石器・フレーク				
能取岬西岸遺跡	集落 包藏地	オホーツク 文化期	竪穴	土器・石器・フレーク				
美岬5遺跡	集落	擦文時代?	竪穴			測量調査		

北方民族博物館調査報告 2

能取岬周辺の遺跡

美岬 4 遺跡・能取岬西岸遺跡・美岬 5 遺跡

1999(平成11)年3月31日 発行

編集・発行：北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1 tel.0152-45-3888

印 刷：株式会社 大成印刷
